第一章 破晶姫の訪問者（エトランゼ）

朱鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第一章　破晶姫の訪問者（エトランゼ）

【Ｎコード】
Ｎ９０９６Ｒ

【作者名】
朱鷺

【あらすじ】
呪われた運命。
悲しみの宿命。
それでもあなたは、絶望を打ち破り、夢を追い求めることが、できますか？
世界を諦め、人生に光を見いだせないでいた少年が、目を覚ましたとき、そこにいたのは、別世界の美少女だった。
彼の新たな物語は、そこよりページが開かれる。

アート（文学）と魔法（ファンタジー）の融合作品。

唄が聞こえてきたとき、あなたの物語は始まった。

時空奏演譚ラストマナラーグ第一章　破晶姫のエトランゼ　開演です。

☆★☆

この小説は、大人向きのシリアスなテーマを含んだ異世界ファンタジー小説です。

サクサクと読める、を期待しているという方よりも、感動したい、テーマについた考えてみたい、と思われる方に、この小説を推薦したいと思います。あらかじめ、ご了承下さい。

プロローグ

灰色の、重たい雲が空を覆っていた。その中を慌てるようにして、小鳥達が我先にと逃げていく。降りしきる雨の中、懸命に翼をはためかせ、向こうの脅威から遠ざかる。生き延びるために、小鳥達は羽ばたく。その時だった。唐突に、水平方向から飛来した鉄砲水が、小鳥の群を丸呑みしたのは。竜のごとく、大きな口を開いた水は、小鳥達を飲み込むと、さらに向こうの家々に襲いかかった。

「グォォォォォォオオオオオオオ！」

凶悪な雄叫びを上げ、水より恐ろしい脅威はすぐに降り立った。遥か遠くからやってきたもの。それは全身を青い鱗に覆われたドラゴン。真っ赤に充血した眼、銀色に輝く鋭い牙、そして蝙蝠を思わせる一対の翼をはためかせ、それは街に襲いかかる。巣をほじくり出された蟻のように、人々が逃げていく。ドラゴンは、そんな人々を睨みつけると、大きな口を開き、再び鉄砲水を撃ち放った。

「晶術　護晶鏡壁（クリスタルウォール）！」

突如として、クリスタルが人々の頭上を覆った。遅れて激突する鉄砲水。クリスタルが砕け、破片がパラパラと舞うが、壁はすかさず再生。

「なりません姫様！」

甲高い女性の叫び声と共に、姫様と呼ばれた彼女は、雲が切れた空から姿を現した。満月の光に照らされた少女、透き通った翼を持ち、碧い長髪を風になびかせ、彼女は細く微笑んだ。

「ここからは私(わたくし)がお相手ですわ。あなたを、永遠に刻まれる芸術に変えて差し上げます」

彼女は右手を天に向けて伸ばした。すると、右手に白銀の光が集う。やがて、ゆっくりと剣の形になると、それは質量を持って彼女の手に収まった。白銀に輝く剣を、確かめるように一振り。そんな彼女をドラゴンは鋭く睨む。敵と認識し、再び鉄砲水を吐き出した。

「護晶鏡壁(クリスタルウォール)！」

彼女の正面にクリスタルが現れる。再び激しく衝突する鉄砲水と結晶の壁。

キラキラと、満月の光が乱反射して、破片が地面に降り注ぐ。鉄砲水の終わりと同時に、彼女は素早く飛翔。小鳥のように優雅に飛び、かつ小鳥よりも早く飛ぶ。鉄砲水が幾度と彼女を目指すが、すんでのところでクリスタルの壁を張り、その脅威を防いだ。その都度、壊れた結晶が地面に落ち、少しずつそれは増えていく。

業を煮やしたドラゴンは、自慢の牙を光らせると、蝙蝠の翼をはためかせ、彼女の背後をとった。

「まずい、姫様！」

住民の避難を終えた騎士と思わしき人が、地面から悲鳴を上げた。その横に立つ、先ほど姫様と呼んだ少女は驚いたように目を見開いた。

「この布石は初代様の…まさか！姫様は…！？」

不敵に笑った青色の彼女は、破片が転がる地面に向けて急降下。その後を追うドラゴン。地面すれすれで、梶を水平に戻した彼女は、ドラゴンが破片上空に達すると剣を地面に向けた。

「縛晶鏡棺（クリスタルコフィン）！」

満月に照らされた無数の破片が、突如動き出し、一瞬にしてドラゴンを包囲、そして青い鱗に張り付いた。

クリスタルに包まれたドラゴンは、動きを封じられ、地面に転がる。それはまるで氷像。真っ赤に充血した眼に映るは、黄金の月。そして、次には翠の瞳が映った。

「あなたはもうおしまいですわ。今から使う魔法は、初代フォーマルハイト家当主、ルチア様の十八番ですのよ。儚く散る一瞬の芸術となりなさい！結晶秘術　破晶鏡殺（クリスタルパルス）！！」

彼女は、剣を思いっきり振り下ろした。

氷像は、音もなく一瞬で砕け、月光の中、色鮮やかになった、細かいクリスタルが、空を舞った。

「と…そ…か…で…ときそら……で時空奏！」

ガツンと、見事にチョークが机にうつぶせる彼にぶつかった。どっと笑い声がクラスを包み込む。チョークを当てられた彼一時空奏（トキソラ・カナデ）は渋々と顔をあげた。

「一時間目から寝るとは良い度胸ですね。廊下に立っていなさい！」

中年の男性で化学教師の怒声と、クラスメートの爆笑の中、カナデ

は教室を出ていった。天気が曇っているせいで、廊下は薄暗かった。

一時間目から居眠りをしたカナデだが、前日に夜更かしをしていたわけでは無い。ただ急に、なぜだか分からないが、眠くなってしまうのだ。そして決まってこういうときは、やけにはっきりとした夢を見る。２日前は殺人事件、その前はどこかの国での戦争、紛争、殺し合い、虐待、レイプ、リンチ……

思いつくものは奇妙で残酷なもの。人の叫び声がいやに響くものばかり。そして、数日後には現実としてニュースになるものがほとんどだ。

予知夢、人はこういうだろう。

だが、仮に予知夢だと弁明したところで、誰がこんなファンタジーを信じるだろうか。カナデは、そんなことを大人に話すほど馬鹿ではない。それならば、まだ、どうしようもないおちこぼれだと思われているほうがマシだ。実際のところ、テストの成績は学年ぶっちぎりの一位。教師にしてみれば面白くないことこの上ない。

――今日の夢はなんでファンタジーだったんだろう。

彼は今までに一度もファンタジーの夢を見たことがない、といえば嘘になる。だが、突然襲われる睡魔に見せられた夢の中では初めてだった。

――まさかなぁ。

空飛ぶドラゴンに羽が生えた人間。しまいには魔法なんていう意味不明でバカげた出来事までが起きていた世界。宇宙の真理など知ったことではないが、間違いなく地球での出来事で無いのは確かだ。

廊下で思考に耽っていると、やがて授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。ドアが開き、出てきた中年教師に例のごとく叱られ、授業後に罰則だと言われ、自分の席に着く。そして机に伏せる。友人と呼べる存在がいない彼には、もはや日課となっていることである。

両親の記憶が全く無いカナデ。昔暮らしていた孤児院の職員に、両親のことを一度だけ聞いてみたところ、タオルにくるまれ孤児院の玄関に捨てられていた赤子がお前だ、とまるでカナデの反応を楽しむかのように語っていたのをよく覚えている。

同じ孤児院で暮らす子供達からもはばにされ、職員からも見放され、そんな彼の楽しみは本を読むことだけだった。図書館に入り浸り、特に、科学、医学に興味を持ち、それらの知識はかなり豊富である。もちろんその他の勉強も人の数倍はしていたので、必然的に成績だけは良くなり、二年前に特待生で私立の高校に合格。国からの補償と、特待生の特典で、今は孤児院を出て、アパートを借りてその学校に通っている。

1日の授業が終わり、罰則のため化学準備室へとカナデはやってきた。

罰則の内容は至って簡単だった。化学準備室にある薬物を、アタッシュケースに入れて片付けること。

塩酸、硫酸、硝酸、水酸化ナトリウム、フェノール、ホタル石、鉛の容器、毒々しい色を放つ液体……

その他、学生に扱わせてはいけない代物もある。

だが、まるで事故ってくれと言わんばかりに、それら化学薬品は置

かれていた。

「硫酸にホタル石って……骨まで溶けて消えてなくなれって意味か？そんなに俺って憎まれてるのかなぁ」

最後に残った薬品、H_2SO_4と書かれたビンと、若干緑がかった石ころを交互に見ながらカナデはため息をついた。挙げ句、耳鳴りまでしてきた。仕方がないので、硫酸の蓋をしっかり閉め、ホタル石と鉛の容器と共にアタッシュケースにしまう。

――いや、違う。

顔をあげて耳を済ませてみる。小さく、だけどはっきりとそれは聞こえてきた。光がどこからともなく、カナデの目を差した。

時を……て　…を…え…　……の…音　例え……が来…も　……は……ない

――これは耳鳴りなんかじゃない……唄？

ゆっくりと強くなる光。カナデはアタッシュケースを盾にして、光から目を守る。朝から空を覆っていた雲が切れて、夕焼けの光なのか、とカナデは思った。

……おう　君に……よう　溢れ出る……は心へ　大地に眠る…命から　いつか小さな芽が開く

唄が終わった。光が勢いを増してカナデを包み込んだ。夕焼けなんかじゃない。だが、カナデはそれ以上思考することができなくなった。頭がガンガンし、そして意識を手放した。

一節　最悪な出会い

「全く……今日は疲れましたわ」

碧い長髪をとかしながら、全裸の彼女は鏡に映し出された等身大の自分を見ていた。何気なく右手に持ったブラシを置き、白い肌を撫で、左肩に赤く目立つかすり傷に気づくと、右人差し指をそこに這わす。そして短いスペルを唱えると、指に小さな光が灯り、押さえた傷は消えた。

「ダイダロスの幼態が何の前触れもなく襲ってくるなんて。普通では考えられませんのに」

ダイダロスは大人になれば、最大２０メートルにもなるヘビ型のドラゴン。今回襲来したのは幼態で、まだ7～8メートルほどだった。

「そのおかげで余裕といえば余裕でしたけど……クリスタルパルスの試し撃ちも出来たのですから、まぁ上出来ですわね」

ふわりと髪をどかして、他に傷ついたところが無いかチェックをする。そして最後に胸のふくらみを見て、盛大なため息を吐くと、ベッドの上に置いた寝巻きを取りに向かった。

――う～ん……やけに良い香りがして、柔らかく気持ちいい布団だなぁ。

布団に顔を押し付け、カナデは眠気を取ろうとする。ちょうど、右手に布のような感触を感じたので、それで顔を拭くことにした。

布で顔を拭きながら、カナデは仰向けになる。白い天井が、さらには月の光を通す窓が見える。そこでようやく、自分がベッドで寝ていたことに気がついた。

――どこだ？

まだ半分寝ぼけているカナデは、ゆっくりとベッドに腰掛け、もう一度布で顔を拭く。そして、次に顔をあげたとき、全裸の美少女が、彼の視界に飛び込んできた。

「……」

薄らいだ月光の中でも輝いて見える碧い長髪は、シルクのように細くしなやかに伸びている。華奢な体、雪のように白い肌、それはまるで人形のよう。だけど、しっかりと無駄無く筋肉もついている。年齢は自分と同じくらいだろうか。見開かれた翠の瞳は、月光に照らされ、宝石のように光っている。言葉では言い表せない。適当な言葉が見つからない。あえて言うならば絶世の美少女。

「……すごい」

だんだんと意識がはっきりする中、右手にぐしゃぐしゃになった白い布を持ちながら、カナデは息を呑んで呟いた。

カナデの声で、彼女はゆっくりと我を取り戻す。その見開かれた目は、驚きから次の色へと切り替わる。

「……フェンリル」

ゆっくりとエメラルドの眼を閉じた彼女は、右手を横に出し、わな

わなと蠢く唇で、確かにそう言った。光が右手に集まり、それは剣の姿へ。ルーンが刻まれた剣の刃に、自分の顔が映ると、もはや動物の本能で、カナデの頭は覚醒した。

「え？……いや、これにはきっと訳がある」

ゆっくりと忍びよる彼女に、カナデは白い布を振って降参の意を示した。

全裸の彼女は、左腕で胸を、剣の柄の部分で股を隠し、ゆっくりとカナデに近寄る。近くまで来たから分かるが、わなわなと震えているのは、唇だけでは無く目元もだ。

「……そそそうですわね。このわたくしの、パパパパンツを、そんなに強く握りしめ、ひらひらと振り、顔にこすりつけている人ですもの。相当な訳ありの変態野郎だということは、よ～く分かりますわ！」

――パンツだって！？

刹那の一閃。直感で反応したカナデは、地面に転がり込む。そのときカナデは、持っていた白いパンツが真っ二つに裂けたのを確かに見た。

――こいつ本気で殺す気か！

かつてない殺意。過去、地元のチンピラに絡まれサンドバックにされたとき、カナデは一度だけ殺意を感じたことがあった。あのときは、たまたま通りがかった警官に助けられた。だが、そのときすらも上回る殺意――以前に人間を殺したことがあるに違いない――に、カナデは身体が硬直した。翠の眼を細め、自分を見下ろす彼女の視

線に、思わず顔が引きつる。
やっとのことで、本当に布切れと化した白いパンツを捨て、立ち上がると、手を上にあげながら後ずさった。

「待て！話せば分かる！」

「問答無用！」

ベッドの毛布を身体に巻きつけた彼女が、じりじりと迫ってくる。
右手に輝く光の剣は、背後の月に照らされ黄金色に、翠の瞳には満月が映っている。

「ごめん。何がどうなっているか分からないが、パンツの件はとりあえず謝ろう。だから、頼むから、剣を下ろしてはくれないか？」

「ふざけないで下さいまし！」

――うん、ダメだ。話を聞くような奴じゃない。

こうなると、殺すか殺されるか。この場合の殺すとは、相手を無力化することになるのだが、相手は自分を殺すつもりなのだ。つまり、相手を殺さないことはもちろん、怪我させないようにしようなどと考えることはできない。
ふと、彼女の背後から、自分の眼に銀の光が差した。
アタッシュケースの取っ手の部分が、月に照らされ光っていた。

――逆転のチャンスはある……か。

カナデはふっと笑った。あの中には劇薬が入っている。それを上手

く使えば、彼女を撃退することは可能だろう。

「ん？自分の命が風前の灯火だというのに、何がそんなにおかしいのですの？」

「いや、俺ってつくづくお人好しなんだなぁって」

ゆっくりと、カナデは上げていた手を下ろした。背中に壁が当たるのを感じる。その間にも、彼女はゆっくりと迫ってくる。

「どこをどうしたらそのような結論にたどり着くのか、破廉恥野郎の思考はサッパリ理解出来ませんわね」

「いや、きっと分かるさ。俺にはお前の身体を傷つけることができない。お前が仮に俺を拉致した誘拐犯であっても、どうやらそれはできないみたいだ」

それは彼女が美しいからなのか、と聞かれれば、その通りだとカナデは答えるだろう。神の芸術にして世界の宝石、それくらい彼女が美しく思えた。いや、一つだけ、何か足りないピースがあったような気がするが、それでも親も無く友人もいない自分なんかより、彼女のほうがよっぽど未来が明るい。ここで仮に自分が殺されたとしても、正当防衛が幾らかは認められるはずだ。それならば、と彼は思う。

「俺の負けだ。この通り降参だ。どうやら俺は、お前に勝てそうにもない」

カナデは崩れるような形で正座した。勝利を確信した彼女は、右手に剣を、左手で毛布を持ちながら、さらにさらにとカナデに近づい

て言った。

「いまさら降参ですか？ここまでしておいて。通常あなたのような鬼畜野郎には許されない、このわたくし、ミライ・フォーマルハウトの華麗な美貌を、拝んでおいていまさらですか？許されるはずがないではありませんか。そうですわよね、豚野郎君。冥土の土産としてはこの上ないですわよね」

首筋に剣先が触れる。カナデは膝立ちになって彼女――ミライを見上げた。美しい。でもやはり何か物足りない。何かが足りない。神はいったい何を忘れてしまったのか。どうせ死ぬならば、それを知りたいと思う。

「往生際がいいですわね。もっと抵抗すると思ったのですが……いいでしょう。最後に思い残すことがあれば、それを口にするがいいですわ」

死刑執行人のごとく、ミライは勢い良く剣を振り上げた。そのとき、カナデの目に、見てはいけないものが再び入った。剣を振り上げた勢いで、ミライを覆っていた毛布がずり下がり、またもや生まれたままの姿が飛び込んできたのだ。しかも、月光に照らされ、1メートルと離れていない至近距離で、最も目に近いところが秘部という、最悪な状況が生まれてしまった。カランと、剣が情けない音を出して転がる。その音をきっかけに、カナデは彼女の顔を見上げた。羞恥に震え、エメラルドの瞳には涙粒が見える。そしてこのとき、カナデはそれが何なのか、ようやく分かってしまった。神が忘れてしまったもの、その正体が何なのかを。

「なるほど……お前に足りないもの、それは胸だ。ぺちゃぱい、それがお前の弱点だ！」

「全力で死ね！」

ミライの右ストレートが、カナデの顔面を強打した。口の中に広がる血の味、そして薄れゆく意識の中、カナデはぼんやりと彼女の裸体を見ていた。玉にきずとは言ったもの。やはり彼女にも弱点はあった。神は期待を裏切らない。もともと神など信じていないカナデだが、このときだけは神様を胴上げしたくなった。目覚めてから数分後、生まれて初めて生で目にする美少女と、これまた生まれて初めて生で目にする女性の裸体と、そして生まれて初めて生で目にする、これほど不釣り合いなぺちゃぱいの前で、再びカナデは深い眠りについた。

☆★☆

ミライ・フォーマルハウトの一日は、決まって専属メイドの大声から始まる。

「ミライ様！もう朝です！早く起きて下さい！」

メイドの名はカレン・ナイラ。ミライの専属メイドとして雇われているフォーマルハウト家の使用人。由緒正しき王家、フォーマルハウトに仕え、かつその姫の専属メイドとして働くのだから、能力がずば抜けているのは言うまでもない。

メイド服と白いカチューシャは彼女の制服。若干茶色がかった黒髪と、黒っぽい目。ミライが西洋人風ならば、カレンは東洋人風。そしてもう一つ、決定的にミライと違うのが、その豊満な胸である。メイド服の上からもはっきりと分かるそれには、ミライが幾度となく、いや、多くの女性が羨んだに違いない。まさに欠点が一つもな

い、スーパーメイドであろう。

そんな彼女、かれこれミライとは１０年以上の付き合いで、年齢が同い年ということもあり、使用人と雇い主という関係を超えた繋がりを二人は持っている。

そして、だからこそカレンはミライの弱点を知っていた。そのうちの一つに、特段朝に弱いというものがある。これは絶望的で、ミライが今までに一度たりとも、自分から起きたことは無い。起こさなければ、最悪昼まで眠っていることもある。そのことを十二分に熟知しているカレンは、いつものように、大きなドアを開けながら叫んだ。

「いくつになったら自分で起きられるのですか！もう今年で１６になるのですよ！」

「カレン、わたくしはもう起きてますわよ」

扉を開けた先には、ベッドに座る彼女の姿があった。あまりの想定外なことに、思わずカレンの口が滑ってしまった。

「今日は嵐でもくるのですか？」

「し、失礼ですわ！」

頬を赤く染めながら、ミライは言った。

よく彼女の顔を見てみると、目が充血して、隈ができているではないか。これでようやく、カレンは納得がいったように頷いた。

「もしかして今日は眠れなかったのですか？」

ミライの近くまで行き、カーテンを開きながら、カレンは言った。寝ていなければ、起きられるのは当然である。

「……えぇ、そうですわ。全てあの変態のせいですわ！あのムカつくような気色が悪い顔を思い出すだけで、はらわたが煮えくり返りそうですわ！」

凄まじい剣幕でまくし立てるミライに、思わずカレンの顔は引きつった。

男性には一度も、いや、女性ですらカレン以外の他人には見せたことがない、一糸纏わぬ生まれたままの姿を、どこの誰かも分からない輩に見せてしまった。しかも、髪から目から、上着にズボンにと、全てが真っ黒。どこをどうみても暗殺者。そんな男に初めて見せてしまった。挙げ句の果てには、そんな極悪人に、身体を評価されペちゃぱい呼ばわりまでされたのだ。かつてないほどの羞恥、憤怒、憎悪が、一度に押し寄せた。ミライの怒りは頂点に達し、一晩中、誰かに愚痴を言いたくて仕方なかったのだろう。

しかし、とカレンは思う。何の前触れもなく、ミライのベッドに現れた全身黒ずくめの男はいったい何だったのだろうか。物音を聞きつけたカレンが、急いでミライの部屋にかけつけたときには、すでに男は全裸のミライに叩きのめされ、失神していた。
その後、ミライを宥め事情を聞いたあと、のびている男を牢に入れ、夜も遅いということもあり、ひとまず解散した。

彼がどのようにして現れたのかは全く不明。
召還魔法の類なのか、それとも転移魔法なのか、もっと別の魔法なのか。どれにしても高レベルな魔法であるだけに、暗殺未遂の疑い

が濃厚なその男は、重犯罪者用の牢獄に繋がれている。

「わたくしは絶対に許しませんわ！あの変態をいかようにしていたぶり拷問するか、一晩をかけて考えたのですわよ！」

どうやらこの青い少女が眠れなかった理由は、羞恥と怒りに震えていただけではなく、もっと別の理由があるようである。

「まずは蝋燭を垂らして火責め。次は水車にくくりつけて水責め。鞭打ちに電撃に凍り漬け。ありとあらゆる方法で責め立て、その身に辱めと虐められる快感を染み込ませ、そして後悔と喜びの中、わたくしの足を隅々まで舐めさせ、生涯を奴隷として尽くすことを誓わせるのですわ！」

これが一国の姫君が、一夜かけて考えだした拷問らしい。解釈を変えれば、ただの変態である。そして、尚たちが悪いのが、本人がそれを全く自覚無しに言っていること。こういった変態的言動は今に始まったことではないので、何を今更だ、とは思うが、どうにかならないものか、とカレンを悩ませる。

「残念ながらその妄想を実現させることは不可能ですよ」

「な、なんですって！？」

「家訓、フォーマルハウトたるもの、いかなるときも美しくあれ、に反します。今おっしゃった行為はどれも美しくありません」

誇り高きフォーマルハウト家には家訓なるものが存在する。

――いかなるときも美しくあれ。

決して醜くあってはならない。外見のみならず、むしろ内面について、よりいっそうである。代々受け継がれ、長年に渡り国を治めてきたフォーマルハウト家の根幹にして中枢を占める戒めだ。

「くっ……ならば、せめて足を舐めさせるだけでも。えぇ、わたくしは美しさの象徴。美に対する口付けは、決して美しくないことではありませんわ！」

「これまた随分自信に溢れた前提になっていますね」

ミライの自信と変態ぶりに、さすがのカレンもほとほと呆れる。そんなことといざしらず、ミライは勢いよく立ち上がる。

「そうと決まったら、さっそく調教兼尋問といきますわよ！」

調教をやけに強調し、ずんずんと扉へと突き進んで行った。そして、例のごとく、カレンはミライの２つ目の絶望的な弱点に気がつく。部屋着のミライは、動きやすいという理由からミニスカートを履くのだが、その中から、ちらちらと見えてはならない場所が見えているのだ。

「その前にまず、服を着替えてから行動して下さい。しかもパンツも履かずに……先ほどから中身が丸見えですよ」

ベッドの下に転がっている、真っ二つに裂けたパンツを見つけて、カレンはため息まじりに言った。ミライの２つ目の弱点、それは絶望的にドジであることだった。

だいたいは、今回のようにカレンの指摘のおかげで、ミライが公で恥ずかしい目にあわなくてすむのだが。

「あの男！ぜえええぇったい許しませんわ！全力でぶちのめして差し上げます！」

翠の目を真っ赤に燃やし、目尻をつり上げた憤怒の形相でミライが振り返ってきたので、思わずカレンの足がすくんでしまった。

二節　尋問

「えっと……とりあえず縄をほどいてくれない？」

真っ白な天井とシャンデリアが頭上で目立つとある一室。カナデは、ロープでぐるぐる巻きにされ、いもむしのように地面に転がっていた。目の前には青いドレスを着た自称姫がふかふかの椅子に座り、その横には無表情で控えるメイド服を着た自称メイドがいる。カナデは、自分が拉致監禁され、縄で拘束されているという現実にも関わらず、意外と冷静だった。

そもそも、なぜこうなったのか、カナデには全く分からなかった。確か自分は、学校の理科準備室にいたはず……

なのに、気がついたらベッドの上にいて、そして目の前には全裸の少女がいた。最初、それはただの夢だと思った。全裸もおかしいが、何より彼女がとても日本人とは思えない風貌だったからだ。碧い髪に翠の瞳。決め手は唐突に剣を取り出したこと。そして、再び自分は少女に殴られ意識を失い、これで夢が終わったのだと思った。だが、それは違った。今度目覚めた場所は、薄暗く肌寒い牢屋。鉄格子の窓から差した、太陽の光で、彼は目覚めたのだ。

「あなたは暗殺未遂の容疑者なんですわよ？不可能に決まっていますわ」

「だからなんで俺が見ず知らずの他人を殺さなけりゃならないんだよ。凶器だって無いじゃないか」

「顔から何まで全てが凶器ですわ！」

やけに豪華な椅子に座り高圧的な態度をとるミライ。そしてカナデは、自身が置かれた現状が全く理解できていない。あまりに理不尽だ。カナデはだんだんイライラしてきた。

「第一なんでお前はそんなに偉そうなんだ」

足を組み、自分を見下すミライに対して腹が立ってきたカナデが言うが、

「偉いからに決まっていますわ。わたくしはフォーマルハウト家の姫君にして次期女王。あなたのような薄汚い極悪非道な破廉恥とは通常会話することができないほど、わたくしは偉いのですわよ」

やはり予想通り、頭に血が昇るような答えが返ってきた。

カナデの中で何かが切れる。

「お前、頭を一回検査してもらったほうがいいぞ。姫？女王？なんだそりゃ。おとぎ話の夢世界じゃあるまい。はっきり言うが、お前、バカだろ」

怒りのあまり吐き捨てた。顔を真っ赤にさせ、勢いよくミライは立ち上がる。そして、またもや手を銀色に光らせ剣を取り出すと、カナデの鼻にその剣先を向けて言い放った。

「バ…バカですって！？このわたくしがバカ！？よくもそんなことを言えたもんですわねっ！万死に値しますわっ！そして、なんで剣を向けられても、そんな平然とした顔をしていられるのですかっ！」

「タコがいくら騒いだって全く怖くないんだよ！」

「今度はタ…タタタタコですってぇ！」

ミライがここまでバカにされたのは、姫として生きていて初めてのことだった。しかも相手は暗殺者。素姓不明の男。屈辱で眉が釣り上がり、感情の変化に呼応して剣が光り輝く。

「ミライ様落ち着いてください。そして、そんな物騒なものをむやみやたらに振り回さないでください」

今にも剣が首を跳ね飛ばさない様子を見かねて、ずっと黙って控えていたメイドのカレンが、ミライに座るよう促した。

しぶしぶといった感じで、ミライは踵を返し、豪華な椅子に腰掛ける。

このままミライに任せていては埒があかないと、今度はカレンが話し始めた。

「あなたは今、暗殺未遂の容疑者なんですよ。だから縄をほどくことはできません」

「だからなんで暗殺なんだよ！」

どうやら根本的なところから互いの認識が食い違っているようだ。だからミライとは会話にならなかった。このことに気づき始めていたカレンは、ならばと質問をしてみる。

「それではなぜ、ミライ様のベッドに現れたりしたのですか？」

「こっちが聞きたいくらいだよ。目が覚めたら、いきなり裸の女の子がいたなんて」

カナデがミライの方をちらりと見ると、そっぽを向かれた。どういったことか、とカレンは頭を悩ませ少し考えると、再び話し始めた。

「では質問を変えます。あなたはどこから来たのですか？」

「日本」

カナデはぶっきらぼうに答えた。だが、彼の予想に反して、カレンの表情からは疑問符が飛び出していた。

「ニホン？妙な地名ですね。どこですか、それ？」

「はい？日本だよ、日本っていう国名」

「国名？この世界にはそんな国ありませんよ」

「え……だって今しゃべっている言語は日本語だろ」

「何を言ってますの？これはハルモニア語ですよ」

「ハルモニア？」

「えぇ、フォーマルハウト家が治めるハルモニア王国。私達の世界、海の民の唯一の国にして長年平和が保たれている王国ですよ」

今度はカナデから疑問符が飛び出した。ハルモニアなど聞いたことがない国だ。

――まさか、あの夢が！？

胸騒ぎがする。確かに、今思えばこのミライという少女、あの夢に出てきたドラゴンを退治していた少女にそっくりではないか。冷や汗が垂れる。カナデは、この質問でどうか自分がバカにされますようにと願いながら聞いた。

「な、なぁ。もしかしての万が一だが、この世界に魔法ってあるのか？いや、自分でも頭がおかしいようなことを言って…」

「何を言ってますの？そんなこと、当たり前ですよ」

カレンが、どこからともなく水を具現して見せた。カナデは驚愕する。夢が、またしても現実となってしまった。ありえないファンタジーが現実となったのだ。衝撃のあまり、頭がガンガンする。気が遠くなりそうだ。

「ちょっと、顔が真っ青ですわよ？」

「あぁ……いや、大丈夫だ」

不思議なことに、なぜかミライに心配され、カナデは自分を取り戻した。自分が、異世界に来てしまったという事実は、とても信じられるようなものではない。だが、少し考えれば納得がいく。何もないところから剣やら水やらを出現させたり、姫だのメイドだのハルモニアだの、どう考えてもファンタジーな世界。

——まぁ、別にいいか。

普通ならば家に帰りたい、と騒ぐところだろうか。だが、カナデは冷静になり、我を取り戻した。適応力がある……というよりは、予知夢のことがあったから。そして何より、自分が住んでいた日本と

いう世界には、たいした未練が無かったからだ。生涯ぼっちだった自分には、残された者もいない。だったら、別にそんなショックを受けなくてもいいじゃないか。今まで多くの知識を頭に叩き込んできた。それならば、今度は実践で生かすとき。果たして、どれだけこのファンタジーな世界で、自分の現代知識が生きるだろうか。そう考えれば、わくわくしてはこないだろうか。

「正直に言う。どうやら俺は異世界からやってきたみたいだ」

もちろん、こんなことを冷静に言ったところで、あのミライという少女が信じるはずはないのだが。

「ですが、困りましたね」

カナデは自分が異世界にやって来たということを受け入れ、ミライがそれを嘘っぱちのでたらめだと抗議し始めてから数分後、一人黙って悩んでいたカレンが突然口を開いた。

「どうやら彼を騎士団に突き出すことができなくなってしまいました」

「な、なぜですのっ！」

ミライがありえないと叫んだ。カレンが説明する。

「それは、彼が魔法を使えないからです。魔法を使っていれば、少なからずは魔素が身体から漏れ出すもの。先ほどの彼の供述から、彼は魔法が使えないと推測したのですが、やはり、いくら私が調べても、彼からの魔力反応はありません」

「意味が分かりませんわ。それが、いったいどういう問題になるのですの！」

「証拠不十分」

「はい？」

「ですから、証拠不十分ですよ。魔法が使えないのに、いったい彼がどうやってクリスタル騎士団による厳重警備網をくぐり抜け、寝室に忍び込んだと立証できます？無論、クリスタル騎士団がサボっていたのならば話しは別ですが」

姫直属の部隊、クリスタル騎士団の任務は、主に姫であるミライの護衛。だが、このままでは、クリスタル騎士団が、魔法すら使えない者の侵入を許したことになってしまう。クリスタル騎士団とやらはなんて無能なんだ。そのとおり、これはクリスタル騎士団の面目、果ては存続に関わる問題になるのは想像に難くない。クリスタル騎士団を失って一番困るのは、他でもない姫自身。そして、クリスタル騎士団が有能であることを一番よく知っているのも姫自身。ダイダロスの件でも死者が出なかったのは、彼らの助けがあってこそ。遠回しだが、カレンはミライのことを思ってこう言っているのだ。

「そ、それであってでもですね！わたくしの身体が無料なはずがありませんわ！」

「ミライ様、いかなるときも美しくあれです。彼が無罪放免だと分かったならば、これ以上の野蛮な行為はできませんよ」

事態を丸く収めるには、これが最善なのだ。

幸いにもカナデのことを知っているのは、ここにいる二人だけ。おおっぴらにしなければよいのである。

夢での出来事と二人の会話で、カナデはここまで思考を至らすことができた。そして、だからこそ、もっとも楽な方法がなんであるのかも、彼は分かっていた。

「くぅぅ……わたくしの裸を見ておいて、無罪だなんて！なんたる屈辱！」

「まぁまぁミライ様、そう落ち込まずに。彼は、異世界から来たのですから、姫の“客人”として、しっかり“おもてなし”をすればよいのですよ」

やはりな、とカナデは思った。おもてなし、すなわち逆暗殺。全てを闇に葬ってしまえばよい。全て無かったこと、自分の存在すらも無かったことにすればよい。そうすれば、今まで通りの平穏がやってくるのだ。

「その手がありましたか！さすがはカレンですわ！」

ミライがゆっくりとカナデのもとに近寄ってきた。カナデは二度目の覚悟をする。だがいっこうに、その時は訪れなかった。

「さぁ殿方、わたくしの足をお舐め。至高の芸術に対する口付けは、客人として当然のことですわよ」

「だ、誰がするか！この性格ブス！」

「ぶ…ブスですってぇ！聞きましたかカレン！わたくしのような乙

女に向かって、バカ、そしてタコの次はブスですよ！」

ミライは足でいもむし状態のカナデを仰向けに転がすと、その上にまたがった。ドレス姿でこんなことをするのは本当にどうかしているとカナデは思う。どうやら、もう一人の常識人もそう思ったようで、苦笑いをしながらミライに言った。

「まぁ殿方を尻に引くような女性は、ほどほど乙女からは遠いとは存じますが」

「カレン！あなたはどっちの味方ですの！」

「さて、私はこれにて失礼させてもらいます。姫様からのご調教……失礼、ご寵愛の後、お部屋をご案内させてもらいますので、後ほど」

「待ってくれ！とりあえず、このじゃじゃ馬をどけて、縄をほどいてからいなくなってくれぇー！」

カナデの叫びも虚しく、メイドは一礼して去っていった。代わりに、彼の顔に綺麗な足が近寄ってくる。

「馬はあなたですわよ。しっかり躾てあげますから、覚悟なさいまし！」

カナデは思った。ミライは性格が悪いのではない。口では言うが、決して残酷ではない。とんでもない天然で破天荒、そして優しく、重度な変態なのだと。美人で賢いだけに、どうやったらこうなるのかと、理解に苦しむのだった。

☆
★
☆

ハルモニア王国の歴史はとても古い。今では大陸全土を占める唯一の国家になったのだが、さかのぼること約２５０年前、世界は混沌としていた。争いが絶えず、ダイダロスなどといった魔族による度重なる襲撃。ついには、伝説の赤竜リヴァイアサンの出現。そんなとき現れたのが、今日伝説の人物と目されるルチア・フォーマルハウトだった。彼女の魔法は強大で、とりわけ晶術と呼ばれる魔法は、無類の強さをほこっていた。人々の争いを鎮め、魔族を撃退し、やがて彼女はリヴァイアサンと戦った。戦いは熾烈を極めたが、死闘の末、彼女はリヴァイアサンの撃退に成功。その後、ハルモニア王国を築いたと言われている。

そして現在、この国の実権を握る人物が誰だと聞かれれば、ハルモニアの人々はこう答えるであろう。

彼の名は１５代目王――アウストリヌス・フォーマルハウト。フォーマルハウト１５世。計画経済によるインフラ整備に、中立公平な政治には定評がある。決して税金の使い道を王の取り分とすることなく、国の発展に貢献するよう使われている。

――いかなるときも美しくあれ。

アウストリヌスが欲望に溺れることは一切無かったのである。

ゆえにここ数年、王都アルファは凄まじい発展を遂げた。魔法による建築法、魔法による交通手段、全てが全て魔法による方法で考えだされ実験され……

日本で言えば、まるで電気のように、魔法が使われるようになってきたのである。

ハルモニアの人々は、さらにこう言うだろう。王の一人娘の名は知っているかい？

その人こそ、知る人ぞ知るミライ・フォーマルハウト様。あのお方こそ、ルチア様の再来だと。
それはなぜか？と聞かれれば、彼らはさらに続ける。
光り輝く氷雪の魔剣フェンリルの使い手。それこそが、ルチア様の生まれ変わりの証。伝承でしか伝わっていない、どこにあるかも不明だったルチア様の宝剣を、ミライ様は取り出してみせたのだ。なぜ剣に選ばれたのかも納得がいくと彼らは言う。ミライ様が１４歳のとき出場なさった、王国主催の武道会において、オールノックアウト優勝という甚だしい活躍があったからだ。

以前はここまでで王家のストーリーは終わっていた。だが新たなページが、今日からは増える。
先日の満月の夜、ミライ様がダイダロス相手に一人で立ち向かい、見事撃退。そのときミライ様が使われた魔法、クリスタルパルスは、ルチア様の秘術の一つ。若干１６での秘術成功者は過去に例がない。容姿端麗、頭脳明晰、天才的な魔法センスに剣の腕前。やはり、ミライ様こそ、ルチア様の生まれ変わりなのだと。

「そのスーパーマンが足を舐めろ、だなんて言う変態とはね」

部屋を案内してくれるというカレンから話を聞き、つくづくミライはどうかしている、とカナデは思う。いや、これは意外と普通なのか。歴史に残る天才発明家、エジソンは小学校すら退学になった。学校に行っていないファラデーだって、現代科学の根幹になる発見をしている。他にも、後世になっても賞賛されるような有名人は意外と変人が多い。

「天才は奇人なり……か。むしろ変人じゃないと常識をねじ曲げるようなことはできないしね」

「常識をねじ曲げるといえばミライ様もそうですね。例えば先日の話。何度も話題になりますが、クリスタルパルスは本当に難しい魔法。ですがミライ様は、相手を結晶化することで、それを可能にしました。結晶をいじることはミライ様にとって、いやルチア様の血を引くフォーマルハウトの者にとっては朝飯前のこと。ならば相手を、一時的にでも結晶に統一してしまえばよいと。発想が斬新というか……普通は思いつきませんよ」

ガラスサイズから分子レベルまで。対象を好きなように砕く魔法、それがクリスタルパルス。対象の組成組織により、微妙な調整が必要となり、普通ではまず使いこなすことができない。特に生物の身体は、タンパク質やカルシウム、水分のように、有機物、無機物、さらには固体、液体と多くの異なる物質が存在する。ミライの場合は、ダイダロスを結晶化することで物質の状態を統一し、調整をしやすくしたのだが（それでも物質自体が一つになっているわけではないので非常に難しい）、それをいとも簡単にやってのけた人物もいる。あのルチア・フォーマルハウトである。これならルチアが伝説になるのも頷けるだろう。

「ところで、ずっと疑問なんだけど魔法ってなに？俺の世界には魔法なんて無かったから、よく分からないや」

逆の立場なら科学って何って聞かれるようなものか。カナデは、質問してから思うが、もし自分がそんなことを聞かれたら、相手の満足いくように答えられる自信がない。

「なんて答えればよいか難しいですけど……根本からお話すれば、まず魔素という概念が重要になってきます」

全ての物質は魔素からなっている。生命の有無に関わらず、いかな

る物質も、その最小単位は魔素である。魔素の集まり方の違いで初めて物質特有の性質が現れ、原子や分子となる。およそ１００年前、大魔法学者ウィザードによって提唱された理論だ。これを、ウィザードの魔素説と呼ぶ。

「魔法とは、大気中に溢れる魔素を操り、物質の生成、状態、形状、性質、運動といったさまざな変化を可能にすることをいいます。これらをまとめて、私達は魔法変化と言います。簡単に言えば、火を起こしたり、水を湧かせたり、風を放ったりと、おおかたのことは、使役者の能力と保有する魔力、周囲の魔素量でなんでもできます。もっとも、これが大問題なんですけどね」

やはり科学みたいなものか、とカナデは理解した。扱う人間によって出来が違うのは科学だって同じこと。保有する魔力量というものが、いわば先天的な頭の良さみたいなものだろう。そして、手軽に使えるということは、使う人によって良くも悪くもなる。特に、より能力がある人が悪事に使えばどうなるか、おおよそ理解はいくだろう。

「基本的に魔法は、大気中に一定量の魔素さえあれば誰でも使えます。ただ、より強力な魔法になればなるほど、術者が保有する魔力や技術がものをいうようになります」

さらに続くカレンの話では、ファンタジーゲームで出てくるような属性魔法というものは存在しないらしい。理論が構築され、そういった概念が無くなったのだろう。誰でも火をおこせるし、水を湧かせられる。個人の得意不得意を無視した、理論上の話ではあるが。そして最後に、カレンはもう一言言った。

「もちろん、ものごとには例外がつきもの。ミライ様が扱う晶術は、

フォーマルハウトの者のみしか使えません」

科学でいえば遺伝だろう、カナデはこう納得した。魔法変化の中の状態変化、さらにその中の物質の結晶化に特化した魔法、それが晶術。液体や気体を固体に、とりわけ結晶にする魔法だと言う。

魔法についての話をずっと考えていたカナデは、いつの間にか、これから自分が当分住むであろう客室へと来ていた。

部屋の中は、こざっぱりしたビジネスホテルのような空間で、ベッドやトイレもある。さすがに風呂は無かったが、それでも住むにあたっては十分過ぎるくらいだ。

「夕方には城内の水浴び施設を、ご飯は食堂を使って下さい。あと……服はお昼前に係りの者がお持ちします」

「なんか悪いね。何から何までやってもらっちゃってさ」

犯罪者から一転してのビップな待遇に、カナデはなんだか申し訳なくなってきた。カレンは微笑んで、カナデに言った。その笑みは、思わず見とれそうなほど、可愛らしいものだったが、笑顔とは裏腹に、言葉は残酷なものだった。

「無償ではありませんよ？あなたはミライ様のお客様。暇人のミライ様がお呼びになられたら、いつでも行かなくてはなりませんからね。ちなみにミライ様の剣のお相手を、今からお昼頃にかけてしてもらう予定です」

ミライは国一番の、剣豪である。さっと顔が青ざめるのを自覚したときには、カレンは城の地図をカナデに渡し、一礼して出て行ってしまった。

ふとベッドの上を見てみると、あの化学薬品が入ったアタッシュケースが置かれていた。カレンが気をきかせて持ってきてくれたのだろう。ただ、カナデはこのとき疑問に思った。
ずっと忘れていたことだが、この薬品を使えば、確かに暗殺が可能なはず。中身を見れば分かること。にもかかわらず、カレンはあえてそれを見逃したのか。カナデには真意が掴めなかった。

「どちらにしろ、このケースはいつも持っていたほうが良さそうだな」

間違って誰かが触ってしまったら惨事になるかもしれない。とくにここが異世界ならば、異世界の人達が化学を知るはずもない。
カナデはアタッシュケースを左手に持つと、右手に持った地図を読みながら、部屋をあとにした。

三節　ミライの非日常とカレンの憂鬱

カナデは指定された訓練所へと、渡された地図を頼りに向かっていた。

表面の簡略化した城の全体図によると、この城は西の塔、東の塔、中央の塔に分かれている。その中でも、中央の塔の面積が一際大きく、前後に長く飛び出している。ただ、高さは東西の塔に比べて小さいようで、東西の塔は中央の塔の上を、渡り廊下のようなもので結ばれているようだ。

地図によると、東の塔には国王、后の部屋が、中央の塔には議会がある。これら二つで国会議事堂と首相官邸を合わせたようなものか、とカナデは考えた。

そして詳しく裏面に書かれているのが西の塔について。ミライ専用の塔である。

まずは、自分が今いる場所を探すと、そこは三階の客室だった。地図にあるとおり、ビジネスホテルのような、たくさんの部屋が両サイドに並んでいる。

ただ、今は自分が唯一の客人のようで、たまに珍しそうなものを見る目をして通りがかるメイドがいるくらいで、全体的にひっそりとしていた。

階段を下に降りながら、今度は四階のミライの部屋を見た。さすがは姫といったところか。一つのフロアが丸ごと部屋になっている。

その上の五階は天井階で、東の塔との連絡通路がある。

二階も客室で、今は静かだった。
階段を降りきり、目的地である訓練所へと、カナデは目を通そうとした。そのとき、カナデの手から地図が抜かれた。碧い長髪が視界に入る。
カナデは呆れたようにため息を吐いて、彼女の勝ち誇った顔を見て言った。

「お姫様、何のようですか？」

あえて、丁寧な口調でカナデは言った。ここでミライをつつけば、蛇どころか狼が出かねない。実際、今自分は死へと向かっているようなものだからだ。

「あら、わたくしは、あなたが道に迷わないよう、わざわざ迎えに来て差し上げたのですよ？」

迎えに来た理由は大方予想できる。だが、カナデには魔が差してしまった。このミライという少女――なんてからかいがあるのだろうか。
だから、丁寧な口調で話すのも馬鹿らしくなったのでやめる。

「なるほど。俺のことを心配してくれたわけか」

「あ、あああありえませんわ！誰があなたのような変質者なんか……わたくしが心配したのは、あなたが道に迷ったことを口実にして、剣の試合をサボらないようにするためですわ！」

ミライが正論を言っているのは分かる。至って正論。だが、予想通りの反応をしてくれる。顔を真っ赤にして、人差し指を突きつけてくる姿は、実に滑稽だ。これが一国の姫であるから、尚更おかしい。

それでも、これ以上やると試合を中止してもらえなくなってしまうので、カナデは笑いをこらえて棄権を求めた。

「ああ、そのことなんだけど……俺って剣を触ったことないから持ち方からして分からないんだけど」

剣道の試合すら、カナデはまともに見たことがない。本物の剣を握るなど、もってのほか。光る剣を振り回す映画なら見たことがあるが、あんなの通常の人間では不可能だ。

「何を言ってますの？あなたの国では剣を握って戦いませんの？」

ミライは疑っているように首を傾げた。カナデはうなずき肯定する。

「それではどうやって魔族や悪党を倒していますの？」

「まず魔族なんてのはいないし、悪党には拳銃を使うよ……剣は使わないな」

「魔族がいないですって！？そして拳銃ってなんですの！？全く意味が分かりませんわ」

ミライは驚愕した。

魔族がいない――自然災害のほとんどが、魔族によって起こされるこの世界。魔族なんか存在しなければ良い、魔族を滅ぼそう、そう考えた人の数は計り知れない。そして、ミライもそのうちの一人だった。

「ミライ様！」

廊下の向こうから、ミライを呼ぶ声が聞こえてきた。カレンである。あちこち探しまわったようで、息を切らしている。

「いきなり部屋を飛び出して、どこかに行かないで下さい。あら……ミライ様は彼のことを心配なさって」

ふふふと微笑んだカレンに、ミライの顔はまたもや真っ赤になった。

「カレン！なぜそんな得体も知れない奇妙な発想が思いつきますの！それより、この不埒者の発言も奇妙そのものですわよ！」

「だから俺の名前は不埒者じゃなくて……そういえばまだ名前言ってなかったっけ。俺はカナデっていうよ」

「あなたの名前なんかどうでもよいですわ」

ミライはそっぽを向いたが、カレンはおじぎをして言った。

「私の名前はカレンといいます。カナデさん、よろしくお願い……」

「カレン！空気を読んで下さいまし！」

「あら、ミライ様も挨拶をなさったほうがいいですわよ。まさか、誇り高きフォーマル家の者が、自分の名前すら言えないという……」

「わたくしの名前はミライ・フォーマルハウトですわ！」

扱い方がうまい。さすがは十年以上の付き合いだ。カナデは感心してカレンを見た。もちろん、じゃじゃ馬姫様の自己紹介はこれで終わらない。何か付け加えたくて仕方ない様子で、数秒間頭を抱え考

え込む。そして、カナデを指差し、高らかに宣言した。

「これからあなたは、わたくしのことを、ご主人様とお呼びなさい！」

カナデ＝奴隷。ミライ＝主人。

ミライの頭の中の構図を全く把握できていないカナデは、口をあんぐりあけて、しばらくそのまま動けなかった。そんなカナデの様子を、ミライは言葉が決まったのだと思い、満足げに踵を返し、頬がピクピク動いているカレンを連れて、どこかへ行ってしまった。

その後、カナデは思ったが、ミライは果たして何をしに来たのだろうか。本人のみぞ知ることである。

フォーマルハウト城西の塔。周囲を姫直属の部隊、クリスタル騎士団の兵舎に囲まれた塔の一階には、大きな訓練所が存在する。クリスタル騎士団のメンバーはもちろん、姫であるミライ・フォーマルハウトも利用する訓練所である。

「それでは、まず剣を構えてくれませんこと？」

カナデが剣を全く扱えないということが判明してからはや数時間。太陽がすっかり天を昇りきってしまった頃、カナデは剣の握り方から一般的な構え方、簡単な動作の仕方までを習得していた。

本来はミライと試合をする予定であった……のだが、カナデは渡された木刀すら満足に扱うことができなかった。カナデが嘘をついて、わざとしているとは到底思えない。

剣を何年も握ってきたミライには、カナデが全くのド素人であると

いうことがすぐに判断できた。
そして、そんなド素人を相手にするほど、ミライは残酷ではない。
ゆえに、方針が変わったのである。

――カナデに剣の指導をする。

これをミライが突然言い出したとき、カナデは拍子抜けした。
カナデは自分が嫌われても当然のことを、ミライにしてしまったと思っていた矢先のことである。年頃の女の子の裸を見てしまったことは――それがどんなに理不尽であったとしても――やはり悪いことだという認識が、カナデにはあったからだ。

ただ、その後に続いたミライの一言で、カナデは盛大なため息を吐いたのである。

「あなたは、わたくしの奴隷なんですのよ。下位魔族の一匹や二匹、余裕で倒せるくらいになってもらわないと困りますわ」

そして現在、カナデはミライとカレンに付きっきりでコーチしてもらっている。

ちなみに二人とも、絶世の美女である。容姿端麗という言葉を、そのまま形にしたような人物。時折近くを通る騎士団のメンバーは、まずその光景に驚き、しばらくすると羨む視線に変わる。そして次はこう思う。

――あの男は誰だ。

全身黒づくめの、見るからに怪しい男が、なぜ姫様に専属メイドにと、誰もが憧れる美人二人に個人指導を受けているのか。少数精鋭

で構成されているクリスタル騎士団は、しばしば部隊の最高司令官でもあるミライやカレンから指導を受ける。だが、それはあくまで、全体として、である。ミライは身分など関係ない、遠慮などしないで欲しいと言うが、個人的に教わるなど恐れ多くてもってのほか。普段からミライのそばにいるカレンにしても、どこか近寄ってはいけない気がする。
これが一般的な見方である。

だが、例外は存在した。
噂を聞きつけたのであろう。一人の少年が、休憩のため水を汲みに行ったカレンのもとへと近寄って来た。

「やぁカレン。今日も一段と綺麗だねぇ」

少年は、自分の金髪を手で流しながら、にっこり微笑んで言った。
カレンは内心でため息を吐き、作り笑いをして答えた。

「これはこれはフンボルト郷。今日はどういったご用件で？」

「やめてくれよ。僕と君との仲ではないか。ラスターと呼んでおくれ」

どんな仲なのか、カレンには全く分からなかった。

「それでは失礼してラスター。私は今、仕事中です。冷やかしならばあとにしてくれません？」

「酷いなぁ。僕がいつ君のような美人を冷やかしたというのかい？」

ラスターのしつこさに、カレンはいい加減うんざりしてきた。これが、ほぼ毎日のように続くのだから、なおさらである。
そんなとき、カレンに救世主が現れた。大量の汗と、かすり傷だらけのカナデがちょうどやって来たのだ。

「あっカレン。急用が入って今日の練習はもう終わりだから、急いで部屋に来て欲しいってさ」

カレンは胸の内でほっと一息吐き、ラスターの方を見て頭を下げた。

「それでは姫様がお呼びだということなので……失礼します」

そして、カレンはそそくさと逃げるようにして行ってしまった。ラスターは、カナデの方をキッと睨むと、通りすがりに小さな声で脅すように言った。

「君、どこの家の者か知らないけど、調子にのるのも大概にしとくんだね」

「はい？」

カナデが振り向いたとき、ラスターはすでにその場にいなかった。

☆★☆

ミライとの最悪な出会いから、早くも一週間が過ぎていた。ミライとカレンとの剣の修行で、カナデは充実した日々を送っていた。だが、一つだけ。カナデはこの世界で、唯一厄介だと思うことがあった。

貴族――それは自分の世界、かつて中世ヨーロッパで君臨した貴族と、さして違わないことを、この世界でカナデは学んだ。
身分や家柄を気にするのが貴族。
このラスタバン・フィン・フンボルトという人物は、まさにその象徴であった。

「名もなき家の者が、なれなれしく僕に話しかけないで欲しいね。姫様がお許しになられているとしても、僕に対しては節度ある態度を取るべきだよ」

カレンがミライといないと、必ずといっていいほど現れるラスター。それは、もはやストーカーである。もちろん、カレンがミライに訴えることはできる。だが、カレンはそれをしなかった。ひとえに、フンボルト家が国の重役であるためだ。自分はしょせんメイド。ミライに迷惑をかけるわけにはいかないと、カレンが思っているためである。

やがて、カナデが現れるようになると、カレンはミライがいないとき、カナデと共にするようになった。
これが、ラスターの癇に触ったのである。
カナデに何かにつけて文句を言ってくるのはこのため。そしてカナデは、このことに気がついていた。

「ミライがいないときを見計らってくるなんて、ずいぶんと陰湿な奴だな」

剣の稽古の終わりに現れたラスターを、カナデは一言で切り捨てた。

「姫様を呼び捨てだなんて。無礼者！」

果たして無礼なのはどっちなのか。だが、カナデは相手にするのをやめた。カレンのため、そしてミライのため。もめ事を起こすことは、あまり賢いことではないと判断したからだ。

「それでは失礼しますよ、フンボルト郷。早くお仕事にお戻り下さい」

「あいにくと僕は学生でねぇ。ここにいるのは、将来クリスタル騎士団に入ることが決まっているので、その見学も踏まえているのさ」

「学生？学校があるのか！？」

カナデは少し驚いたような声を出した。確かに、ラスターはミライやカレン、そして自分と同じくらいの年齢に見える。もとの自分の世界ならば、ちょうど高校生くらいであろう。

「何を言っているんだい？ここハルモニアが首都クリスタラードにある国立魔法学園は有名ではないか」

ラスターは怪訝そうに言った。カナデは急いで、

「あぁ、そういえばそうだったな」

と言ったが、ラスターは首を傾げて、さらに言った。

「君は本当にどこから来たんだい？首都の民ではなさそうだけど」

「はははははは……」

さすがにラスターにまで、自分が異世界から来たとは言えないカナ

デだった。

☆★☆

それはサンゴが広がる海の世界。海底深くにある城に、一人の人魚姫がいました。あるとき、人魚姫は、海で溺れている一人の男性を見つけました。その男性は、地上の王子様でした。人魚姫は、王子様を助け出し、彼に一目惚れしました。
ですが、そのとき偶然浜辺を通りがかった娘が、王子様を見つけてしまったため、人魚姫の出る幕はなくなってしまいました。

人魚姫は、どうしても自があなたを助けたのだ、と王子様に言いたかった。そこで人魚姫は、海の魔女のところへと赴き、人間になれる秘薬を手に入れました。
ただし、その薬にはリスクもあった。
――飲んでしまえば声を失ってしまう。

そしてもう一つ。

「もし王子様が、別の女性と結婚するようなことがあれば、あなたは泡となり消えてしまうでしょう」

人魚姫は、それでも王子様への愛を信じ、薬を飲んでしまったのです。

人魚姫は、王子様と宮殿で暮らせるようになりました。
ですが、人魚姫は王子様を助けたのが自分だということを伝えることができません。
やがて真実がねじ曲がり、王子様を助けたのは、偶然浜辺を通りがかった娘だ、ということになってしまいました。

結果、王子様と娘の結婚が決まってしまいます。
悲嘆に暮れた人魚姫の元に、人魚姫の姉がナイフをもってやってきました。
「このナイフで王子様の心臓を刺し、溢れた血を自分に塗れば、あなたは人魚に戻れるわ」
覚悟を決めた人魚姫は、深夜遅く、王子様が眠る寝室へとやってきました。
――殺せば自分は人魚に戻れる。だけど……
人魚姫は、それでも王子様を殺すことができません。
人魚姫は朝日と共に、ゆっくりと泡となり消えてしまいました。

「なんと腹が立つ童話ですこと」
暇だと言うミライに、何か面白い話をしろと言われたカナデは、以前にこの世界の人々を海の民ということを思い出し、日本に伝わる童話、人魚姫を話し聞かせていた。
「まぁそういうなよ。永遠の愛なんて立派じゃないか」
納得がいかない様子のミライに、カナデは苦笑いした。
「思いを伝えられないなんて、何の価値もありませんわ。思いというものは、相手に伝えてこそ意味があるものですのよ」

「ならミライならどうする？言葉も分からないし、第一声だって出ないじゃないか」

「手足があるのですよ？絵を書いてみるなり、ジェスチャーしてみるなり、方法はいろいろと存在しますわ。仮にそれでも無理でも、必ずわたくしならば、その壁を粉砕して差し上げますわ！」

「壁を乗り越えるじゃなくて粉砕するのですか。ふふふ、ミライ様らしいですわね」

「カレン、何がおかしいのですの？今のは当たり前のことですわよ」

「ふふふ……ミライ様もいつか恋をなさったとき、どういったふうになるのか、楽しみですわね」

微笑むカレンの眼差しの向こうには、少しだけ、カナデには暗い霞が見えたような気がした。

四節　漆黒の狩人

深夜遅く。ふくろうのような鳴き声が響く街外れの牧草地帯。羊とも牛とも似つかない生物が一頭――どこからか抜け出して来たのであろう――草を食べていた。
静かな闇の中。
真っ黒なそれは、茂みから羊のような生物の様子を伺うようにして、物音なくゆっくりと移動する。暗闇に二つの赤眼が光る。
羊のような生物は、ようやく異変に気付いたようで、街に向かって四本足で走り出した。
茂みから飛び出る漆黒。
――二つの赤い閃光が走る。
黒いそれが、鋭い前足で羊のような生物の首筋を引っ掻くと、大きな悲鳴と共に、羊のような生物は息絶えた。
狩りを終えた静かな狩人は、三日月に向けて、凶悪な咆哮を轟かせた。

「最近、頻繁に家畜への被害をもたらせているという未確認生物の討伐。それが今回、わたくし達クリスタル騎士団に下った使命ですわ」
「……で、俺はいつ、クリスタル騎士団とかいうのに入ることになったんだ？」
ミライに呼ばれ、例のアタッシュケースを持ち、外のグランドへと

やってきたカナデは、いきなりの出撃命令を、剣と共に言い渡された。
ミライの他には、カレンが。そして三人の屈強な男達が、クリスタルの紋章がついた鎧と、それぞれ剣やら斧やら槍やら、己の得物を手に、馬へと跨がっていた。

「あなたは団員ではありませんわ。わたくしの雑用兼雑用ですのよ」

「無駄に二乗せんでよい」

今日はいつものスカートではなく、キラキラと青く光るワンピースのような鎧を纏っているミライ。何でもこの鎧、クリスタルの繊維で出来ているフォーマルハウト家に伝わる家宝である。鎧というよりも、シルクのドレスのようにも見えるが、それでも本人曰く鎧らしい。

「減らず口を叩かずに、早く馬に乗って下さいまし。乗馬の仕方は以前の訓練で説明したはずですわよ」

ドレスはもちろん、それを着こなす本人も一まぁ胸は無いが一この上なく美しい。不機嫌な顔をしていなければの話だが。

「あぁ、嫌というほど覚えているよ。人が初めて馬に乗るっていうのに、散々馬を暴れさせて。落馬させられる身にもなれってんの」

「正確には落馬していませんわよ。全てカレンが、風の魔法で、あなたが地面に落ちるギリギリのところで、宙に浮かせていましたもの」

「おかげで嫌というほど落馬の恐怖を味わうことが出来ましたけど

ね。気一つ抜けたもんじゃない」

「それならば、わたくしに感謝するべきですわ。二度と乗馬中に気を抜くことが無くなったのですもの」

「はいはい、どうもありがとうございました。毎日毎日、危険馬のご機嫌取りをしていますので、あまり必要なかったかもしれませんけどね」

「どこの誰が危険馬ですのよ！」

「お前……自覚無しかよ」

「ちょっと、それどういう意味ですの！」

「全く……二人とも、そろそろ行きますよ」

もはや恒例となっている二人のやり取りに、カレンはため息を一つ吐いた。

☆★☆

ハルモニアが首都クリスタラード。

石造りで統一された街並みは、かつての西洋ヨーロッパ建築を思い起こす。

大通りでは、人々が物を売買する喧騒が、喫茶店でおしゃべりする主婦の声が、街中を走り回る子供達の大声が響き渡り、賑やかな雰囲気を作り出していた。

確かに人々が生きている。

そこには、カナデがかつて過ごしていた地球の姿が、かぶって見えた。
日本では無くとも、どこかの海外は、きっとこんな感じなのだろう。
「何をボケっと口を開いてキョロキョロしていますの」
「いや……あぁ悪い」
屈強な三人の男達を先頭に、後続にはカナデ、ミライ、カレンが続く。
その一個小隊は、喧騒賑やかな道の真ん中を、ずんずんと突き進む。
街の人々は、そんな彼らが通ると道端に寄り、中には頭を下げている人までいた。
そんな人々に対して、カレンは微笑み、男達は手を上げて挨拶する。
「あなたが住んでいた世界には、このような街は無かったのですの？」
「うん。似ているようでちょっと違うかな。俺が住んでいた世界は、３００メートルを超える塔や１００メートル以上の高層ビルが立ち並ぶ、そして鉄の塊が大地を駆け空を飛ぶ世界だった」
「……また凄い夢見たいな世界ですわね」
手を振って挨拶するミライは、華麗な笑顔を保ったまま言った。
普段から仏頂面では無く、こんな笑顔をしていれば可愛いのに、とカナデはつくづく思う。
「俺にしてみればこっちの世界のほうが夢見たいだよ」

建築様式こそ西洋ヨーロッパ。だけどカナデは、信じられない光景を目にしていた。

――鉄の塊の代わりに、人が空を飛んでいるのだ。

翼をつけた者、マントを靡かせる者、中には普通の格好で空を飛ぶ者。数こそ多くは無い。だけど実際に、数人が、空を飛んでいる。

「飛翔の魔法は高位魔法の一つ。カナデさんは見たことが無かったのですね」

違う。カレンの言葉に、カナデは内心で否定した。

一度だけ。カナデは、蒼い少女が翼を持ち、空を舞う世界を見た。

まだこの世界に来る前、夢の世界で、カナデはミライを見ている。

「何ですの？今度はわたくしを見つめてきて。もしかしてこのわたくしの美しさに骨抜きになってしまったのですか？なんと罪深いことでしょう。わたくしはあなたなど相手にするつもりはありませんのに。せめて下僕として一生こき使って差し上げましてよ」

「なぁ、ミライも空飛べるよな？」

「はい？ずいぶんといきなりですわね。えぇ、わたくしは空を飛べますわよ。もちろんカレンも」

子供ならば、一度は夢見た空を飛ぶこと。鳥に憧れ、大空を羽ばたこうと、かつての地球の偉人達は、莫大な年月をかけ、様々な方法を編み出した。

だが、この世界では、それすらも簡単に、魔法という異常現象で、

可能としてしまう。

「カナデさんも飛んでみたいですか？この大空を」

穏やかに、カレンはカナデに向けて微笑んだ。

「うん」

「それならば、帰ったら特訓ですわね。しっかりみっちり調教して差し上げましてよ」

カレンの笑顔に、思わず本音が出てしまったカナデだが、言わなければ良かったと後悔した。

また、落馬させられかねない。

いや、墜落か……

一行はやがて、街外れの牧草地帯へとやってきた。街と反対側に広がる茂み、さらにその向こうには、深い森がある。青天の中でも、薄暗い森からは、時折吹く風により、がさがさと、葉が擦れる音をたてていた。

六人は陣を組み、注意深く辺りを見渡したが、特に気配はしない。

「ここではなさそうですね」

ミライは来た道を引き返そうと後ろを振り向いた。

――茂みから、小さな影が飛び出す。

コマ送りのように、ゆっくりと、獣がミライに飛びかかかる。カナデには、そう見えた。

恐ろしいと感じた。怖いと思った。

だけど、その思考よりも先に、なぜか身体だけが、勝手に動いた。
気付いたときには、ミライを懐に抱いていた。
獣の鉤爪が、背中に食い込む。
冷たい液体が、背中を伝うのが分かる。
近くで、カレンの詠唱が聞こえ、水流が、獣を弾き飛ばした。

地面に激突したカナデは、すぐに身体を起こした。
幸い、傷は深くない。背中を擦りながら、カナデは敵を見た。
それは、水流に弾かれた漆黒の獣が、やすやすとバランスを取り、地面に着地したところだった。

サイズは５０センチくらい。下半身は小型犬のようにも見えるが、顔を見て、考えを改めた。首が三つ。六つの赤眼が光る。

三又の尻尾をムチの如くしならせ、銀色に輝く牙を向き、威嚇する漆黒を、カナデは唯一、これ以外知ることは無かった。
その名は――地獄の番犬ケルベロス。
漆黒の赤い閃光は、カナデを獲物と見定め、後ろ脚で強く、地面を蹴り飛ばした。

勢いよく飛び込んでくる漆黒の獣。カナデは咄嗟の判断で、持っている剣を、野球のバットのように構える。相手はボールだ。デッドボールコース。ならば、当たる前に打ってしまえばよい。
左足を開き、レフト方向へと引っ張るイメージで、カナデは剣を振り切った。

刃は空振った。だが、剣の平面が、予想外にも浮き上がり、さらにどうしてか分からないが、剣に当たったケルベロスの胴体が、高く、宙に打ち上げられた。
ふわりと、自分が起こした現象に驚くカナデの横から、蒼が飛び上がった。光り輝く剣、フェンリルが、落下を始めた獣へ伸びる。

鈍い金属音が鳴り響く。

ケルベロスは、ミライの一振りを、真ん中の頭の牙で受け止めた。
左右から、ミライを食いつきにかかる。

フェンリルの白銀が増す。
白き獣が、黒き獣に、食らいつかんばかりに。

「終わりですわ！破晶鏡（クリスタルパ）……」

その一撃は、またしても空振りに終わった。
呪文詠唱の途中に、ミライは何か空気の塊のようなものに弾き飛ばされたのだ。

空中でバランスを整え、地面に着地したミライは、自分を急襲した先、ケルベロスが逃げていく茂みの向こうを睨んだ。

「何者かが、あの魔獣を操っているみたいですね」

ミライの横へとやってきたカレンが、ぼそりと呟いた。

「少々想定外ですわ。召喚師が相手とは……あなた達は城から応援を呼んできて下さるかしら。わたくし達三人で、まずは偵察に入り

ますわ」

フェンリルを鞘に納めたミライは、騎士団の男達に向かって言った。

「ちょっと待て。三人って、ミライとカレンの他に、あと一人、誰のことだ？」

「あれだけの波動魔法を見せておいて何を言ってますの？あなたに決まっていますわよ」

「波動魔法！？」

「物理攻撃と思わせての魔法攻撃。いつ、どこの書物を読んで習得したかは知りませんが、お見事でしたよ。おまけに治療魔法まで完璧ですし」

そういえば、背中の痛みが無くなっていたことに、カナデは気付いた。血が止まっているあたり、傷も塞がっているようだ。

「思っていた以上に才能があるみたいですわね。少し見直しましたわ。まぁ、それでもわたくしの下僕としては足りないくらいですけど……わたくしを護ったのも、下僕として至極当たり前のことですから、感謝などするつもりはありませんからね！勘違いしないことですわっ！」

「……いろいろ突っ込みたいとこ満載だけど、何を勘違いするんだ？」

「ううるさいですわねっ！」

なぜか不機嫌になるミライに、カナデは首を傾げる限りだった。

☆★☆

茂みの向こうに広がる森林地帯。太陽の光すらも遮ってしまうその場所は、一年中ずっと薄暗い。鳥の鳴き声や、風で葉がかすれる音。時折動物達の鳴き声も聞こえる。大人数で行動すれば目立ってしまうのは必至。三人くらいで行動するのが丁度良いのは分かるが、なぜに自分がそのメンバーにいるのか、カナデには全くわからなかった。

「もちろん釣り餌に決まっていますわ」

「うっさいわ！」

首都クリスタラード校外にあるこの森林地帯。もちろん、王国の支配が行き届いていないわけがない。
今は収穫の時期ではないので、人々はあまり近寄らないが、キノコや薬草など、様々な恩恵を王国にもたらしている。

おそらく今回の事件の容疑者は、その時期を上手く狙って、魔獣を操り、家畜を奪っていたのだろう。

馬に跨がった三人は、やがて、森の入口までやってきた。ミライがカレンに頷き合図すると、カレンは青い水晶がはめられた大きな杖を掲げ、二言三言呟いた。

水晶が強く振動。探知魔法である。波を波状に放つことで、物体の大きさから形状までを探知することができるらしい。さながらレーダーのようである、とカナデは思った。

「見つけました。敵は先ほどの魔獣と人型が一つ……小屋？のような場所にいます」

カナデは、薬品が入っているアタッシュケースを、馬に鞍にくくりつけ、ゆっくりと馬から降りた。

「そうと分かれば、さっそく行きますわよ！」

そして、ミライを先頭に、一行は森の中へと入っていった。

☆★☆

森を少し奥に行ったところに、その小屋はあった。不自然に、小屋の周りだけ、木々が伐採されていたため、土地が開かれており、予想以上にも早く見つけられることが出来た。

カナデは剣を抜き、ミライはフェンリルを光らせ、カレンは詠唱準備へと入る。

「それで作戦は？」

カナデは息を殺して聞いたが、

「合図と共に扉を粉砕。真っ正面から飛び込むのですわ！」

ミライの応えに思わず吹き出した。

「それ作戦じゃない！」

「3！2！1！」

「だから人の話を聞けぇぇぇぇ！」

集中を高めたミライには、もはやいかなる声も届かない。ミライの周囲に生まれる光の塊。やがて、それは、無数の槍へと生まれ変わる。

「刺晶鏡槍（クリスタルランス）」

風が吹き荒れる。落ち葉が舞う。草木が揺れ、空気が渦巻く。中心をカレンにして、大気を揺さぶる風の波動。

「Ｗｉｎｄｉｎｅ（ウィンディーネ）」

風の精霊の名を持つ竜巻は、生まれては生まれ変わる氷の槍を飲み込み、無数に天へと打ち上げた。

そして――――

「「輝き鋭く刺し穿て――――氷柱吹雪（つららふぶき）！！」」

斜方投射された氷柱は、ゆっくりと、ベクトルを下へと変えた。だんだん早くなる氷の槍。加速する竜巻。

氷柱の豪雨が、風の渦が、木が切り開かれた一体、小屋を中心にして、激しい爆音を轟かせた。

「なんつ～暴挙だよ」

カレンと小屋を結ぶ竜巻の架け橋は、竜巻の内部の氷柱が、太陽に照らされ光ることで、遠くから見れば、幻想的な光景を生み出して

いるのだろう。
カナデが見ている所では、砂煙が舞い上がり、凄まじい衝突音が鳴り響いている。
やがて、光の架け橋が消滅すると、木造の小屋も跡形もなく壊されていた。代わりに、その中から二つ、大小の影が現れた。
思わずカナデは、「よく生きていたなぁ」と呟いてしまった。
「相手は魔獣をコントロールするくらいの魔導師。気を抜いていると殺られますよ」
「なるほど〜」
と、カナデはカレンの言葉に頷いた。そして、さらっと、近寄ってくる二つの影を見て、額から冷たい汗が垂れたような気がした。
大きな影が、小さな影を制し、ミライの前へと進み出る。黒いマントで全身を覆い、フードで標準すら見ることはできない。
全身真っ黒の影は、両手でフードを外すと、口元をニヤニヤとさせ、紫色の分厚い唇を開き、ミライに挨拶をした。
「これはこれは、お姫様直々にこんなところまで。ミライ・フォーマルハウト第一皇女。何か私に用でもありまして？」
その顔を、ミライは冷たく軽蔑した視線で、眺めた。彼女は彼を知っていた。正確には、クリスタル騎士団が、否、ハルモニア王国全土のブランチに置かれている手配書で、彼女はその顔を覚えていた。過去、ハルモニア王国転覆を狙い、数多のテロ行為を働いた彼を、彼の組織を、皇女たるミライが、もちろん、忘れるはずがない。

「その汚れた唇で、わたくしの光明な名を呼ばないでもらいたいですわ。えぇ、第一級指名手配犯、ルベロ・オルトロス狂賢者。犬を追ってみましたら、とんだ大物が出てきましたわね」

王家の敵にして国家の敵。すなわち国民の敵。この狂賢者を滅っせれば、組織の力を大きく削ぐことができる。使い魔はいるが、それでも相手は単独。こんな好機はもう無い。

「ふはははは！」

余裕の表情を浮かべていたミライに向かって、オルトロスはいきなり笑い始めた。その笑いは、不気味なもので、思わず鳥肌を、ミライはたててしまった。

「追い詰められたでも？私が何の策も無く？さすがは世間知らずのお姫様。罠に嵌まったネズミがどちらかも分からないとは、破晶姫の名が聞いて呆れる。かのルチア・フォーマルハウトもあの世で嘆いていることでしょう」

1対3の絶対的不利な状況にも関わらず、オルトロスの表情は、まるで意に返さないよう。彼には、絶対の余裕があるのだ。不気味な微笑みを浮かべ、彼は、手を天に掲げる。

「子を殺せば親は怒る。それは人間も動物も、もちろん魔獣だって同じ。それが、仮に、ドラゴンであったとしても！」

あのとき現れた魔獣は幼態だった。

あのとき現れた幼態はドラゴンだった。

あのとき現れたドラゴンは――――

「くっ……」

ミライの顔が歪む。
二つの小さな黒いシルエットが、地面に描かれる。
翼が、牙が、尻尾が、羽ばたく音が、存在感を誇示するかのように、大きくなる。

「今さら気付いたところでもう遅い！さぁ、見るがいい。怯え震え上がるがいい！つがいの水竜は、まさにお怒りだ！ふはははははは！」

怪物の襲来と共に、オルトロスは姿をくらました。

続けて上がる咆哮。全身真っ黒。体長は１５メートルほど。
それが二体。

「「グォォォオオオオオオ！」」

真っ赤な赤眼は、怒りに染まり、二体の海竜ダイダロスは、茜色に染まる天空より舞い降りた。

五節　戦闘開始（前編）

かつて、それを見たのは、画面の向こうの世界だった。
想定はしていた。予想もできた。夢が現実となることも分かっていた。
だけど、実際に、それを目の前にしたとき、カナデの頭は、完全にフリーズしてしまった。
立ち塞がる漆黒のドラゴン。
獰猛な牙を夕日に照らし、大きな翼を開くそれは、畏怖（いふ）の象徴でもあろう。
いつの日にか、ミライはこう言った。
「わたくしの前に立ち塞がる物は、全て粉砕してくれますわ！」
今、立ち塞がっているのは、ゲームの世界でも最強として君臨したドラゴン。
彼女は、どうしているだろう？
どんな気分でいるのだろう？
そのとき、カナデの横を、青い閃光が駆け抜けていった。
白銀が、飛び上がるのを見た。
光の刃が、毛むくじゃらの胴体に、食い込むのを見た。
「くっ……ははは……ははははははは」
自分は何を思っていたのか。

何を考えていたのか。
あのミライ・フォーマルハウトが、あのミライ・フォーマルハウトが、ドラゴンごときで怯むわけがないではないか。
恐怖で、そして可笑しくて、よくわからない感情が入り交じって、笑いが込み上げてくる。

ミライの攻撃を受けなかった方が、ふいに飛翔した。
パニックで気づかなかったが、こちらは青色。
青と黒のつがい竜。
ダイダロスは通常、体の色は青だが、メスは子供の育成期だけ黒になる。
暗い色の方が、闇に溶けやすく、目立ちにくいためだ。
性格は、より凶暴に。

オスのダイダロスは、飛翔から旋回へ。口元に水を集め、カナデに向けて撃ち放った。

思わず目をつぶってしまったカナデは、次にくる痛みに備える。が、それはいっこうにしてやってこない。
おそるおそる目を開いてみると、自分の正面の大地が隆起し、水流から自分を護っていた。
カレンの魔法である。カレンは、ひらりとジャンプすると、そのまま空へ飛翔。水の塊を複数浮かせ、水流を放ってきたダイダロスを牽制。カレンの下方、透けた翼を羽ばたかせたミライは、剣を目映い限りの白銀に輝かせていた。
狙いはメスのダイダロス。
第二撃で、十八番の発動。

「芸術は――――粉砕だ！破晶鏡殺（クリスタルパルス）！！」

重力を味方につけ、黒いダイダロスの脳天から一閃。
鏡が割れるような音が響く。光がダイダロスの頭部で拡散する。
この瞬間、ミライの勝利をカナデは確信した。

しかし、ダイダロスは砕けてなどいなかった。砕けたのは、鋭い牙の一本のみ。ミライの顔が歪み、「硬いですわね」と、呟いたような気がした。

カレンに追われていたほうのダイダロスが、動きがとまったミライに向けて、鉄砲水を集わす。
クリスタルパルスの使用後に起こる術後硬直のため、ミライは回避できない。

その光景を見ていたカナデは、ミライがピンチに陥ったのだと知った。どうにかしなければならない。同時に、先ほど自分が発動したらしい波動魔法が頭に浮かぶ。

もしかしたら……

カナデは手に持っていた剣を、青いダイダロスに狙いを定めふりかぶった。むちゃくちゃだ、と自分で分かっている。それでも、なぜだか成功するような気がした。

「うらぁぁぁぁ！」

野球投げ。

飛来する剣。

夕日に照らされた刃は、重力に逆らい、突然加速を、さらには螺旋

回転まで始めた。

驚くのはミライ。

その視線に映る現象は、あまりに非現実だ。

ダイダロスから水流が、放射される直前に、螺旋回転した刃が、片翼を貫いた。

ためていた水流が、天へと昇る。絶叫したダイダロスは、態勢を傾け、地面に向けてまっ逆さま。

衝突音が、悲鳴ともとれるような叫びが、森全体を震わせた。

「やった……のか」

遥か彼方まで飛んでいった剣と、地面に激突したドラゴンを見て、カナデは口を開き、歓喜と驚愕で唖然とした。

次の瞬間には、歓喜は全て驚愕へと変わった。

「グォォォオオオオオオ！！」

翼を貫かれたはずのダイダロスは、再び立ち上がった。首をもたげ、大きく翼を開く。１５メートルの高さから睨まれ、威嚇され、恐怖に冷や汗が垂れる。それでも、右翼の中央には、確かに、穴が空いていた。

その穴を確認したとき、カナデは、瞬間的に横っ飛びした。

勘は当たった。水流が、自分がいた場所を直撃していたのだ。

ほっとしたのも束の間、更なる危機が、カナデを襲う。丸呑みする

気なのであろうか。牙を折られた方のダイダロスが、大きく顎を開き、カナデに迫ってきたのだ。

絶望的な状況、死を覚悟した刹那の時。
ドラゴンに負けないくらいの羽ばたき音が、突然空から降ってきた。

気付いた時には、自分は空に浮かんでいた。

美しく蒼い髪、白を基調としたサファイアを連想させる線が入ったドレス。そこには、凛々しく華麗な少女が、自分の視界を覆っていた。クリスタルの翼をはためかせ、ドラゴンから距離をとる彼女を、本当に天使かと思った。

彼女は、カナデに向けて何か言おうとする。思わず息を飲み込んだ。

「何をボケっとしていますの。存在自体邪魔ですわ。早く逃げなさい！」

「人の感動をぶち壊すな！」

お姫様抱っこされてまで、存在を全否定されるとは、誰が思おうか。とんでもない暴君だ。
このとき、唐突に、冷たい何かが、カナデの脳内を流れた。今、自分はミライに、何を言われるのを期待したのだろう。

心配されたかった？それとも感謝されたかったのか？
だんだん薄気味悪くなってきたのは、船酔いに似た揺れのせいだろうか。

高度を落とし、馬が繋がれている森の入り口へとミライは滑空する。

「いいから早く逃げるのよ。これ以上、あなたに巻き込みたくないのですわ……」

着陸後、ミライはいきなり、こう言った。びっくりするくらい汐らしい表情に、お前は逃げろ！、と言われたことにも突っ込めず、カナデの目は大きく見開かれた。

カナデの驚きの目線を感じ取ったミライは、いきなり顔を赤らめ、これまた何の前触れもなく怒鳴り始めた。

「か勘違いしないことですわ！わたくしは、あなたが城に応援を要請するため、仕方なく、このように言っているのですよ。断じて絶対に、あなたの身を案じているわけではありませんからね！そして、分かったら、さっさと行きやがれですわ！」

つまり、心配しているのである。

戦い慣れていないカナデが、いきなりドラゴンとの戦闘は、あまりに荷が重すぎる。むやみに命を落とす必要は無い。

この言い方も、ミライの優しさなのだ。

「そうかよ！分かった。それじゃ一つだけ、約束しろ」

だからこそ、カナデは言おう。

彼女ならば、必ず守るであろう約束を。

「なんですの？」

「ミライ……死ぬなよ」

「え……」

まだ彼女を護れるほどの力は無い。今一緒にいても足手まといなだけ。それだったら、生き残る確率が高い方にかけた方が良い。

もう少し、もっと先まで、この少女のことを、美しき彼女を、知りたいのならば。

「もちろんですわ。わたくしは、かの美しきミライ・フォーマルハウト。醜い屍をさらしてたまるものですか！えぇ……もちろん。カナデ！空が光ったら、こちらを見ると良いですわ。未来永劫刻まれる芸術が、きっとそこにはありますから。わたくしが生み出す究極芸術は、あのようなドラゴンなどに、絶対負けたりはしませんから！」

それだけ言って、微笑んだ蒼き美しき破晶姫は、空の向こうへと飛んでいった。

今はただ、自分のやるべき事をしよう。

馬に跨がったカナデは、戦場の反対方向、街の喧騒の中へと、飛び込んでいった。

五節　戦闘開始（後編）

首都クリスタラード。三方位を山で囲まれ、一番奥に、丘の上に建つフォーマルハウト城がある。城下町の中央には噴水があり、普段は市民の喧騒が支配するほど、賑やかな場所だ。

だが、現在そこを支配しているのは、突如として、空から飛来した恐怖の塊だった。

――海竜ダイダロス。

ほんの一週間前に現れた大災害が、噴水の破裂と共に、再び天から落とされた。

次々に城の方へと逃げていった人達。

王国軍はもちろん、クリスタル騎士団のメンバーも、市民の安全確保のため城へと誘導し、たった今、終えたところだ。

ドラゴンが襲ったところでは、犠牲者が出ているかもしれない。

今、ドラゴンがいる近くには、避難しきれてない人がいるかもしれない。

それでも、これ以上、人々は、騎士団も含め、街へと近寄ることができなかった。

というのも、敵は十メートルにも及ぶドラゴンである。

もちろん空も飛ぶし、一撃必殺の鉄砲水だって撃ち放つ。

とてもではないが、並の人間が太刀打ちできる相手では無いのだ。

破晶姫――かつての英雄の末裔、ミライ・フォーマルハウトの帰り

を、今か今かと待ち望むしかないのだ。

カナデが城下町に到着したのは、街の人達が、城へと避難し終え、すっかり静かになったときだった。
普段から街に出ていれば、あるいはミライやカレンならば、そこで異変に気づいていたであろう。

「マヂかよ……」

噴水の中央に陣取り、紅く光る瞳孔を持ったドラゴンと、カナデは鉢合わせてしまったのだ。

足の動きが止まる。
心臓の鼓動が早まる。

夕日は沈み、欠け始めた月の光が、鋭い牙を照らす。
手が一体化した翼を大きく広げ、ドラゴンは威嚇する。

ここにミライはいない。

絶対絶命。

自分以外に誰も……いないはずだった。

「さて、君はこの現状を、どうやって脱却するつもりなんだい？」

背後から、少し震えた声が聞こえた。カナデは、ダイダロスから視線を外さずに後退り、声の主の横に並んだ。

「ラスター！？」

横目で見た彼の顔は、汗が滴り落ちている。それでもラスターは冷静を装い、いつもの口調で言った。

「そんな驚かないでおくれよ。なぜ、未だにダイダロスが襲ってこないかを考えれば、すぐ分かるだろうに」

「……どっちを捕食しようか、迷ってるってわけか」

よくよくドラゴンの視線を見れば、カナデとラスターを行き来しているのがよく分かる。どちらが美味しそうか、見定めているように。まな板の上の鯉の気持ちになった気分だ。

ふいに、ダイダロスの視線が止まる。

歯肉がむき出しになる。

「そう。そしてさらに悪いことに、どうやらこのダイダロス、どちらも食べる気になったようだ」

「ラスター！男なら今すぐ右に飛べ！」

ダイダロスが、後ろ脚で地面を強く蹴った瞬間、カナデは左に飛んだ。少し後ろで空を噛みきる音。すかさず振り返って見たとき、ドラゴンは、自分が今までいた場所まで突進し、そのまま空へと飛びあがった。そして、ラスターはなんとか無事なようだ。破壊された噴水のせいで、いかにも高級そうな服は水浸しになっているが。

「どうやら僕は、魔導師として、本気を出さないといけないようだな」

ラスターだって魔法使い。カナデは、すっかり忘れていた。雰囲気が変わるラスターからは、カレンが魔法を使う時に発する、強いオーラのようなものを感じる。

「僕の能力は創造魔法。その中でも、特に崇高な、生命創造の魔法。そして、創造できる生命は、ドラゴンだ！」

空気に指を這わせ、星のような紋章を、意味不明な文字を、そして光を、ラスターは生み出し、魔導の言葉を、

「Ｎｏｄｕｓ　Ｐｒｉｍｕｓ　Ａｌ　Ｄｈｉ'ｂａｈ（運命に繋がれし第一の結び目）Ｎｏｄｕｓ　Ｓｅｃｕｎｄｕｓ　Ａｌ　Ｔａｉｓ（神意に定められし第二の結び目）Ａｌ　Ｒａｓ　Ａｌ　Ｔｉｎｎｉｎ　Ｍｉａｐｌａｃｉｄｕｓ（聖なる水よりほどけし時）Ａｌ　ｒａｋｉｓ　Ａｖｉｏｒ（天より高く舞い上がれ）」

唱えた。刹那の間を縫って、金色の光の柱が天高く伸びる。空を襲う閃光は、旋回して戻ってくるドラゴンに対峙するように、一つに纏まり、

「竜王召喚（レヴァレンスドラグーン）！！」

ラスターの呟きと共に破裂した。

もくもくとした白煙りが、魔法陣から吹き出す。

新たに現れし敵を睨みつけるダイダロス。

期待が高まるカナデ。

召喚された新たなドラゴンは、

「きゅぴ～」

という可愛らしい声を出して、煙の中から、これまた可愛らしい小さな体で、パタパタと這い出てきた。

「……」

カナデの時が止まった。

ダイダロスの目が見開かれたのは、おそらく冗談では無いだろう。よくよく召喚された、子犬サイズのドラゴンを見てみると、僅かに透けてはいないだろうか。

ふいに、ダイダロスから飛んできた水流が、子犬ドラゴンを撃ち抜いた。

貫通……ではなくて、見事にすり抜けた。

「……ラスター？これはいったいどういうことだい？」

薄らいでいくドラゴンを横目に、カナデは、冷や汗を流すラスターに言った。

「あまり細かいことは気にしないでくれたまえ、ベイビー」

「確かにベイビーだよ！しかも透け透けのな！」

ついには消えてしまったミニドラゴン。

再び地面に降り立ったダイダロスから、大気を震わす咆哮が上がる。
幸か不幸か、ラスターのおかげで、カナデはダイダロスに対する恐怖など、すっかりふっ飛んでしまった。
「僕の出番は以上だ。後は君に任せて失礼するよ」
敵に背を向け、走り出そうとするラスターの襟首を左手で捕まえ、
「まさかとは思うが、逃げだすのか？」
と、カナデは言った。
「それなら君は、どうやってあんな怪物に、勝つって言うんだ？魔法が使えない君は、どうするって言うんだ？」
もはや勝機は無い、とラスターは言いたいのだろう。
実際、その通りだと思う。
視線をダイダロスに合わせているため、相手は警戒して攻撃してこないが、それも時間の問題。
魔法がダメならば物理的攻撃か、と考えたところで、剣すら自分は持っていない。アタッシュケースを持つ右手に力が加わる。
この瞬間にカナデは、はっと閃き、そして笑った。
「考えがある」
自分はおろか、ラスターも、ミライやカレンのような強力な魔法は使えない。物理的攻撃も不可能。こんな状況でも、一つだけ、対抗策が残っていた。

ミライと初めて出会ったときに思いついた策を、今こそ使うときだと。

再び飛翔するダイダロス。

その隙をつき、急ぎアタッシュケースを開き、薬品を取り出す。幸いにも、どのビーカーも割れていなかった。

「それは……魔法薬かい？緑色の魔法薬なんて初めて見たけど」

Ｈ２ＳＯ４と書かれたビーカーと、鉛の容器、そして空のビーカーを、カナデは取り出す。

「これは硫酸。この空のビーカーに鉛の容器を入れて、硫酸を投入。半分だけ蓋をしたあと、ここにホタル石を入れれば、最強の毒ガスが発生する。あとは、最後にダイダロスの口に突っ込むだけさ」

簡単に言ったものの、最後の言葉が一番難しいのだ。タイミングを誤れば、自分までダイダロスの口にダイブしてしまう。遅れれば、自分まで毒ガスに巻き込まれてしまう。

大空を旋回するダイダロスは、ついに降下を開始。獲物を確実に仕留めるため、大顎をめいいっぱい開き、鋭い牙を光らせる。

ラスターに耳打ちしたカナデは、全力で走り始めた。

タイミングは一度きり。
ミスれば終わり。
ゲームオーバー。
ファンタジーでもリセット不可能。

最強の劇薬を使うといっても、それがドラゴンに効果を示すかも分からない。それでも、カナデは走る。ふと、頭の中で、蒼い彼女がよぎった。我ながらに、本当にどうかしていると思う。右目がずきずきとしてきたのも、そのせいだろう。自分に呆れ、身体に鞭を打つ。彼女が護る国のため。彼女ならば、絶対に、勝機が無くても最後まで、敵を倒すことを、諦めたりはしないから。

「芸術は粉砕だ……か。最後の最後くらい、こういうのも悪くないかな」

成功、不成功に関わらず、ダイダロスのスピードよりも自分が早く動けるわけが無い。
ミスらなくても、人生はゲームオーバー。
いったいどこで選択を過ったのだろうと、いまさらだが思う。
それでも、カナデは、突撃してくる死に向かって走る。

――唄が聞こえる。

またこの唄だ。
いったい誰が唄っているのか。
美しく綺麗な音色は、まるで、自分を応援しているようだ。

［時を越えて　光を越えて　始まりの水音　例え終焉（おわり）が来ても　記憶は消えない］

前は、しっかり聞こえなかったが、今回は、はっきりと聞こえる。
大きく口を開いたダイダロスは、よだれを撒き散らす。もう、後戻りはできない。

［唄を唄おう　君に届けよう　溢れ出る想いは心へ］

迫り来る脅威が、とてもゆっくりに感じる。到達まで、あと数メートルというところで、ビーカーにホタル石を投入。

沸き出す気体。

ダイダロスの口内に、勢いよく投げつけた。

［大地に眠る命から　いつか小さな芽が開く］

唄の終わりと同時に、運命は、交錯した。

勝者は、すぐに決まった。

「グォォォオオオオオオー！」

薬品を飲み込んだ瞬間、ダイダロスは、地面にぶつかった。

カナデの足下で、悲鳴を上げる。

苦痛で、のたうちまわる。

悶え、苦しむ。

真っ赤に充血したダイダロスの両眼には、時計模様が映っていた。

気味が悪いことに、秒針が、短針が、長針が、凄まじいスピードで回転していた。

カナデはそれから目を逸らさない。もっと早く進めと念じる。何となく、そのほうが良い気がした。

ついには、口から泡を吹き出した海竜ダイダロスは、全身が痙攣し、やがて静かになり、息絶えた。

「やった……」

膝から崩れ落ちるカナデは、安堵から、そのまま仰向けにひっくり返った。

「な、なんてことだ……あのダイダロスを倒してしまうなんて。いや、君はいったい、何者なんだ」

駆け寄るラスターの声が聞こえる。

疲れを感じる。そして、頭痛がするのに気付いた。特に、目の奥が痛い。

唐突に、白銀の閃光が、天に打ち上がった。

その方向を見た。

ありえないくらい美しい氷像が、そこにはあった。

高さ百メートル以上の氷の塔。

最上部では、二頭のドラゴンが、身体をクロスさせ、空中で、天に向かって、凍りついている。

白銀の光を、放ち続ける氷の塔は、一瞬にして砕けた。

パラパラと落下する氷は、結晶になり、季節外れの雪を降らせる。

月光に照らされ、光を乱反射させ、舞い降りる粉雪を見て、カナデは、とても嬉しくなり、そして、意識を失った。

六節　悪夢の兆候

――魔法。
数多の現象を、魔素を用いることで引き起こす力。火を起こしたり、水を沸き上がらせたり、風を吹かせたり。
これら多くの魔法は、それぞれ、物質変化、状態変化、形状変化、波動変化、創造変化など、簡単に系統立てることができる。
強力な使い手だと、これらの系統を組み合わせたり、同時使用を行ったりする。

カナデは真っ白の天井の下で目覚めた。最初は天国かと思った。自分が寝ている場所が、とても柔らかく、心地よかったからだ。

「いててて……ミライ、どうしてそんなに力ずくなんだ。もっと優しくして」

「このわたくしが、わざわざ相手をしてあげているというのに、何を泣き言言っていますの？仮に、あなたが極めつけの変態であったとしても、殿方ならば、少しは我慢しなさい」

白い布を、カナデの腕に何度も巻き直してくるミライに、カナデは顔をしかめた。

真っ白の天井とふかふかのベット。天国だと思ったここは、フォーマルハウト城の医務室。
あのとき、カナデは死を覚悟した。絶対に終わったと思った。だからこそ、天国だと思って放心していたのに、ミライのビンタで、再び異世界へと呼び戻された。

「わたくしが、せっかく話しかけてあげているというのに、無視するとは良い度胸ですわね」

確か、こんなことを言われたような気がする。

さらに、

「今から包帯を取り替えますわ。か勘違いしないことですわよ！これは、君主から奴隷に対するご褒美。えぇ、間違いなく、ご褒美ですわ！わたくしの代わりに、街を護ってくれた恩返しですのよ！」

と、天に向かって吠えた。

ここでカナデは、あまりに致命的なミスを犯した。

あの時断って、カレンに任せれば良かった……

今さらだが、カナデはこう後悔する。その理由は、ミライが、過去一度も、誰かを手当てしたということが無なかったという事実が、判明したからだ。

「い今のは包帯が勝手に破れてしまったのですのよ。さぁ、もう一度！カレン、新しい包帯をお願いしますわ」

「いい加減に諦めてくれぇー！」

軽く、骨に罅が入った左腕が、真っ赤に腫れている。ミライのせいで、さらに痛みが増す。もっとも、怪我の原因はドラゴン退治。骨に罅が入った程度で済んだのを、喜ぶべきなのかもしれない。

「怪我人は黙っていなさい。猿轡（さるぐつわ）をされたいのですの？」

本を開き、カナデに魔法学の講義をするカレンは、ミライの足下に散乱する白い布を見て、ひきつった笑みを浮かべた。幾度にも及ぶ包帯の交換は、もはや暴力に他ならない。

「それにしても、あなたが使った魔法薬はいったい何だったんですの？ダイダロスの骨を溶かし尽くす魔法薬なんて、聞いたことがありませんわ」

つがいのダイダロスには、もう一体、子供がいた。
一ヶ月に二度もクリスタラードを襲撃したダイダロスは、家族だった。普通、ダイダロスは三体以上で行動しない。三体以上で行動するときは、子供がいるときのみ。そして、家族が街を襲うなんてことは、絶対にあり得ないこと。
自然ではあり得ない。
これは、天災ではない。人災。ルベロ・オルトロスの企てに他ならないのである。

「魔法薬じゃなくてフッ化水素だよ。俺が知る純粋な物質の中では最強の酸化剤……なんだけど、まさかあんな瞬間的に効果が現れるとは思わなかったよ」

フッ化水素は、確かに即効性にも優れてはいる。
多くの物質を、直ちに酸化してしまう。あまりに強すぎる効果のため、実験室では、実験を行う人までもが、危険に晒されてしまうことも度々。
それでも、体長１０メートル越えのドラゴンが、あんなに早く、効果を受け付けるとは、到底思えない。何か、もっと他の理由が、そうしたんだと思うのだが、可能性があるとしたら、ラスターが、何らかの魔法を使ったくらいだ。

――まぁ、それこそあり得ないだろう。

「ところで、あなたのその魔法薬、わたくしと出会ったときにも、持っていたのですよね？」

さぁ、どうしようか。ついにミライは、このことに気付いてしまった。言い訳を考えたところで、カナデが、あのとき、一瞬でもミライにフッ化水素を使おうと思ったのは事実にすぎない。

「人の、かかか体を見ておいて、何とか言ったらどうですの！」

そう考えたことに関して、カナデはずっと申し訳ないと思っていた。いくら偶然の事故であったとしても、やはり、年頃の女の子の裸を見てしまったことだけでも、悪いと感じていた。

それでも、彼女の裸は、厭らしい意味無しで、純粋に美しいと思った。シルクのように、綺麗だった肌。無駄なく筋肉が付いていて、それでいて、スラリと曲線を描いた体型。まさに、彼女こそ、神の芸術だと、今でもカナデは思う……のだが、何か、神様は忘れているのではないか。

「あっ……ぺちゃぱい」

思わず、口にしてしまったカナデが、ミライの顔をおずおずと見ると、

「ぺ、ぺちゃ……」

見事真っ赤に茹であがった。

唇を噛みしめ、睨み付けるミライを見て、しまった、と思ったのは時遅し。顔面に飛び込んでくる拳を、ただ見ているしかなかった。

「全力で死ね！」

その言葉を境に、カナデの意識は再び闇へと消えた。

☆★☆

白いタイルが敷き詰められた屋敷の中。ピカピカに磨かれたタイルは、窓ガラスから射す日光に照らされ、眩しくて目が痛くなるほどだ。

カナデは、その中にいた。

耳を澄ましてみると、女の子の声が、小さく屋敷内で響いている。

なんとなく、カナデはその方へと歩いてみると、女の子の声は、地下へと繋がる階段下から出ていた。

暗闇の階段。カナデは、足音が響かないよう、木製の手すりを頼りに足を忍ばせ、階段を降りる。

がちゃり、とドアが開く音が聞こえた。階段を上る音が響いた。

あっ、と口を開いたときには、うつ向き加減の白衣を着た男と、鉢合わせしてしまった。にもかかわらず、男は、まるでカナデに気づかないかのように、そのまま地上へと上がっていった。

「これは……夢の中なのか？」

普段は、映画を見ているかのように流れる夢なのだが、今回のように、自分の意思や感覚があるのは、初めてのことだ。

地下室から、女の子の声が、一段と強く響いた。

振り返ったカナデは、声の方へと走る。夢だと分かった以上、もう足音は気にしない。

階段を降りきったとき、光がドアが開けっ放しにされた部屋から漏れていた。その中から、女の子の声も聞こえる。

部屋に入ってみると、二人の少女と、一人の少年がいた。

顔を見ようとするが、ぼやけてよく見えない。

「お兄ちゃん、そろそろナナ達の出番なの」

まだ幼い声で、少女は言った。

「にぃには何もしなくていいからね。ララの大魔法で、全部まとめてぶち壊してあげるから！」

似たような声で、もう一人の少女が言った。よくみると、両方ともツインテールで、小さな身長も同じくらい。まだ、あどけなさを感じさせる二人は、どうやら双子のようだ。

「ララちゃん、ぶち壊したらダメなの。人間だけを、めちゃめちゃのぐちゃぐちゃにしないと」

おぞましい発言をする少女の頭に、少年は優しく手を置いた。二人の少女は、嬉しそうにして、互いの顔を見る。

「にぃにはララが護ってあげるね」

「ナナが護ってあげるの」

双子は、頭に置かれた手をいとおしそうに、まだ小さな手で触れる。なんだか、カナデにはその光景が痛ましく感じた。

突然、少年が声を発した。

「そこに隠れていることは、分かっていますよ」

あまりのいきなりのことに、カナデは、ここにいることが、ばれたのかと身を強ばらせた。それでも、夢であるということを思い出して、少年が睨む壁の方を見た。

すると、何もないはずの空間から、黒いローブに身を潜めた女性が一人、現れた。

「申し訳ありません。あまりのほほえま……」

「その先を言うな！」

突然怒鳴った少年に、女性は身を縮ませる。少年は、一つ息を飲んで、感情を殺し、言った。

「で、何のようですか？」

「総攻撃の準備は整いました。王を殺害する手筈も完璧だ、と兄上よりお言葉を頂いております」

ローブの女性は、深々とおじぎをした。少年の後ろでは、双子が何やら囁いている。

その光景を見ていると、ふいにカナデを頭痛が襲った。またもや目

の奥が痛い。
少年が、黒づく目の女性からフードを取り除く。
「そうですか……分かりました。マリー・ナイレアラ様」
少年は、マリーと呼ばれた女性の顔を見て、ニヤリと笑った。
その女性の顔が見たい、と思ったカナデは、少年の背後へとまわる。
頭がずきずきとする。見ない方がいい、と警告しているかのように。
ゆっくりと空間が、かすれていく。
顔が見えるあと少しというところで、頭痛がピークに達し、次の瞬間には、女性の顔が、見知らぬ中年男性の顔へと変わっていた。
男性の顔は、驚きで目を大きく開いていたが、すぐに満面の笑みに変わった。
「やぁ、おはよう。というよりもこんにちはの方が正しいかな。さて、いきなりの質問だが、君が私の娘の裸を見たというのは、本当に真実なのかい？」
いきなり話しかけられ、カナデは驚いたが、意外にも頭の回転は早かった。
私の娘。
そして裸。
いきなり現れた男性。
これだけの情報で、結びつける解は一つしかない。そして、収まる頭痛と同時に、夢は終わりを告げたのだ、と悟った。
「なぁに、私は怒ったりしないよ。もちろん、娘の初めてを奪われたと知った以上、父親として良い気はしないがね」

「軽く訂正を。残念ですが、ミライの初めてを奪った記憶は、僕にはありませんよ。第一、そんなことをしたら、あえなく粉砕されてしまうかと。僕がミライの裸を見てしまったのは事実ですが、話がかなり飛躍していますよ」

「ほぉ。私を誰だと知っていての物言い。実に素晴らしい。いや、この国の者ならば、萎縮して震え上がってしまうはずなのだが。カレンの言っていた通り、どうやら君は本物の訪問者（エトランゼ）のようだ」

フォーマルハウト15世。
アウストリヌス・フォーマルハウトは、カナデに向けて右手を差し出し、握手を求めた。

七節　身体検査（前編）

結晶の都と呼ばれるクリスタラードは、２５０年という長い年月をかけて、ハルモニア王国と共に成長した巨大都市だ。

物流の始まりであり、最終目的地でもあるこの場所は、山々に囲まれながらも、魔法文明最先端を誇る凄まじい発展を遂げた。

豊かな自然は、魔法を最適な環境で行使でき、魔導師育成、魔法薬の調合、武器や防具の生産など、あらゆる方面に恩恵をもたらした。

そんなクリスタラード。三方向を山に囲まれ、一方向からしか人々が行き来できない場所が首都になった理由には訳がある。

かつてルチア・フォーマルハウトの時代。戦乱の世のとき、山々に囲まれたクリスタラードは、文字通り難攻不落の天然要塞だったのである。

その要塞を果たしていた、唯一街道へと繋がる場所は、今では人々が暮らす城下町へと姿を変え、ついには平和を謳歌する結晶の都となった。

城下町を見下ろす丘の上のフォーマルハウト城からは、発展した都の景観と同時に、ハルモニアの歴史そのものを俯瞰（ふかん）することができる。

クリスタラードあってのハルモニアといっても過言ではないのだ。

「私で１５代目。先代が永く築き上げ、大切にしてきた都。何度か魔物に襲われ、危機に瀕したこともあったが、それでも次世代へとバトンを繋いできた。本来、私かミライがやらなければならないこ

とを、君は、己の命を省みず護ってくれたってわけだ。私の宝を護ってくれて本当にありがとう」

しかし、とカナデは思う。アウストリヌスが言うように、彼やミライがやらなければならないのかもしれないが、やれなかったが真実。ミライはミライで、ダイダロスを二体も相手にしていたわけで、アウストリヌスだって、他の用事でクリスタラードを留守にしていたのだ。そもそも、カナデは助けに来なかったのが悪いとは、全く思ってない。

「あはははは……まぁ、どうしようも無かったんですよ。逃げ出そうにも逃げられなかったんだし」

獲物に狙いをつけた獣が、逃してくれるわけがないのである。偶々、鉢合わせてしまったのが運のつき。それならば、と一か八か挑戦してみただけだ。

「そうであっても、君が、いや君とミスターラスタバン・フィン・フンボルトが勇気を出したことには変わりない。そういうわけで、私から君達に騎士の名を持つ勲章を渡したいんだ」

「はい！？」

「クリスタル騎士団に、是非とも入隊してはくれないか？ちなみにミスターフンボルトは、快く引き受けてくれた」

「そんなめちゃくちゃな。戦いなんか、まだミライに剣を習ってから一週間そこそこ。魔法だって、ようやくカレンに教わり始めたばかりだし」

「そんなものは後からどうにでもなる。大切なのは勇気、心じゃ。それに、君の波動の変化系統加速魔法は、かなりのものだと聞いておるが」

ダイダロスの翼を貫いた魔法は、そんな系統なんだ、と少し考えたが、すかさずカナデは否定した。

「波動のなんたらかんたらなんか、僕は本当に何も知りませんよ。あれは、絶対偶々ですって」

そもそも魔法なんて使ったことがない。ほんの数週間前は、ただの高校生だったのに、知るはずもない。

「そうか。そう思うなら、それでよい。じゃが、私個人としては、ミライの今後のためにも、側にいて欲しいのだ」

だが、まるでカナデの思考を見通したように、アウストリヌスは言った。その言葉の端々に、少し愁いも感じたが、すぐにイタズラな笑みを浮かべ、アウストリヌスは続けた。

「ある地方の言葉に、働かざるもの食うべからずというものがあるが、どうじゃろうの」

「それを言ったら、もうおしまいじゃないですか」

今までの待遇が良すぎることは、カナデはとうに理解している。

――いや、あのおてんば変態姫様の相手が、どんだけ大変なことか……

縄で縛られイモムシにされたカナデを、両手を組み、素足で踏みつけてくる暴君が、脳内に浮かぶ。

「それなら、引き受けてくれるかの？」

「分かりましたよ。もう、騎士だろうが、魔導師だろうが、なんだってやってやりますよ！」

半ばやけくそで、カナデは言った。アウストリヌスは満面の笑みを浮かべ、

「それでは、騎士聖堂で待っているぞ」

と、言って腰を上げ、退室した。入れ替わりに、今度はカレンが、失礼します、と頭を下げ、入ってきた。

「入隊の前に、身体測定を済ませる必要があります」

「身長とか体重のこと？」

「いいえ、魔法適性ですよ」

その言葉に、驚きながらも、カナデは期待に胸を膨らませた。

☆★☆

馬車に揺られながら見る、二度目のクリスタラードの街並みは、以前とは様変わりしていた。押し潰された家。散らばるレンガ。馬が走ることで、ばしゃばしゃと水を踏みつける音。中心部の噴水は破

壊され、勢いのない水を放出している。

「あそこに、カナデさんが倒したダイダロスがいました」

カレンが指差す方向では、兵士達が横に並び、通行規制をしていた。なんでも、ダイダロスの原型をとどめた死体は、大変珍しいもので、そこから取れる素材は、高値で取り引きされるらしい。

「その鋭い牙からは、ドラゴンの体表すらも斬り裂いてしまう竜殺剣（ドラゴンスレイヤー）が、頑丈な翼膜からは、火竜サラマンダーの炎からも身を護ってしまう竜鎧（ドラゴンアーマー）が、溢れる生命力の源である心臓からは、いかなる病すらも治してしまう万能薬が、作れるといわれています。他にも、鱗や爪、骨から血まで、巨大な全身全てが、高級品として扱われますので、当然それらを狙う輩も出てしまうのです」

魔族の中でも最も強く、稀少な存在である竜族。ダイダロスは、竜族の中でも下位品種に当たるドラゴンだが、それでもやはり、珍しいことには変わりない。特に、ほとんどダメージがない最高な状態で倒されたため、利用可能な貴重な素材が、多く集められるのだ。

「ミライ様ですら、いや、かのルチア様ですら、不可能なことを、カナデさんは、やってのけたってわけですよ」

クリスタルパルスを使ってしまえば、当然得られる戦利品も少ない。それでも、他に倒す方法がないのだから、使うしかない。

でも、本当に、あのときは、変なことばかりが起きたなぁ……

冷静になって振り返ってみると、なんだか、自分が気持ち悪いとさえ思えた。かつての自分では、するはずのない行動の連続。

どうして、ミライの盾となった？
なんで、ミライを襲うドラゴンを攻撃した？
なぜ、勝てるはずもないドラゴンに戦いを挑んだ？
他人が死のうが生きようが、どうでも良いと思っていたはずだ。その考えで間違っていないはずだ。にもかかわらず、まるで、自分が自分ではない、別の人格が、勝手に行動していたような、そんな気さえする。

「カナデさん。あれが、今から私達が行くハルモニア国立魔法学校です」

物思いに耽っていたカナデは、カレンに促され、吹き抜けの窓の外を見た。
いつの間にか馬車は、街の中心部から遠ざかっていたようで、外は畑が広がり、その少し先に、茶色い煙突が目立つ、一つの大きな建造物があった。

近づくにつれて、だんだん大きくなる建物は、高さ3メートルほどの白い城壁に囲まれ、ものものしい雰囲気を醸し出している。正面に一つだけ、鉄のような金属で出来た、いかにも頑丈そうな門がある。

しっかりと閉められ、人もいないので、もしかして入れないのでは？と、カナデは心配になったが、驚くことに、馬車が近づくと、自然と門は音を鳴らして開いた。
馬車は、そのまま内部へと進み、大きな扉の前で停車した。

カナデは、なんとなく辺りを見渡してみると、扉の右手の方に、教会のようなところを見つけた。

「あれが、騎士聖堂です。そして、ルチア様が祀られている場所でもあります」

そう説明したカレンのあとを、カナデは扉の方へと振り返り、その中へと進んでいった。

七節　身体検査（後編）

魔法学校の中は、思った以上に静かだった。カナデが通っていた高校はもちろんのこと、小学校でも中学校でも、授業をする声が廊下に響いたり、休みの時間では、人がごった返したりするはずだ。にもかかわらず、誰の声もしないのは、魔法学校自体が、臨時休業となっているためだ。

「ダイダロスの襲撃から三日が経ちますが、街があのような状況では、まだ再開できないんですよ」

「だから、その間を借りて、ここに来たってわけか」

体育館のような広い空間にやってきたカナデは、大きな水晶を見つめながら言った。なんでもこの水晶、特別な魔法がかけられているようで、対象者の魔力保有量と同時に、得意な変化系統を教えてくれるらしい。

「例えば、ミライ様でしたら、巨大な結晶が現れ、そして砕けます。状態の変化系統特異魔法、晶術の特徴ですね。そして、結晶の大きさから魔力保有量はC5（カテゴリー）だと、判断できるわけです」

「つまり、その水晶が、術者の魔力を補佐してくれて、一番得意な魔法を出してくれるってわけね」

そして、具象化した魔法の規模で、魔導師の一つのステータスとなる魔力保有量を計ることができる。

「魔力保有量が、魔導師のステータスだと思われがちですが、実際、

そんなことはありません。多ければ多いほど、コントロールが大変ですし、大味な魔法になりがちです。最悪、自分や仲間にまで被害が及ぶなんてことも……」

魔法のコントロールや詠唱にかかる時間、異なる魔法の同時行使にコンビネーション、状況判断能力、そして想像力（イマジネーション）など、様々な能力を基にして、総合的に魔導師ランクが評価されると、カレンは言う。

「それでは、始めましょうか」

カレンに渡された水晶を、カナデは両手に持った。

水晶に視点を定め、意識を統一、集中。テレビでやっていた中国武術の気のイメージを思い浮かべる。

水晶に映るは、水晶前面の空間をバックにした時計模様。

カレンの息を飲む声が聞こえる。

風が吹く。針が回転を始める。最初はゆっくり、だんだん速く。目の痛みが、ぶり返す。感じる風速も増す。気流が渦を巻く。まるで、空間がねじ曲がり、そこへ吸い込まれていくかのように……

そして――――

カレンが大きな声で何かを唱えた瞬間に、強い光が炸裂。少し遅れて、破裂音。さらに大爆発が、体育館の天井を突き破った。

屋根が吹き飛ぶ。

窓ガラスが砕け散る。あらゆる全てが、水晶もろとも、空の果てへと打ち上がった。

カナデは、その一部始終を唖然として見ていた。カレンが、歯を食いしばり、何やら呪詛を唱えている。風を操り、ドーム型に形成。

爆発と飛び交う物体から、自身とカナデを護っているのだ。
やがて、打ち上げられた物体が、地面に落下し終えたとき、カナデはへたり込み、地面に倒れ込んだ。両目の奥が腫れそうだ。意識が遠のく。
時同じくして、カレンのドーム型竜巻も消滅した。
「まさか爆発の新系統。いや、そんなはずは……そんなものが存在するはずがない」

☆★☆

真っ暗な闇夜。月が出ていない空――新月の夜の中、空を飛んでいた。冷たい風を切り、雲を追い越し、空を飛ぶのは、夢であっても心地よく感じる。思わず童心にかえって、カナデは旋回したり、宙返りしてみた。

――あれは何だ？

方角は分からないが、向こうの空だけ、異様に明るい。夜明けなのか、茜色に染まっている。気がつくと、カナデは、そっちの空へと飛んでいた。近づくにつれ、茜色が、空の下に広がる街が、ぼやけて見える。これは朝焼けなんかじゃない。幾本もの黒い柱が、もくもくと立ち昇り、それが靄（もや）になっていたのだ。茜色の正体は、街全体を焼き払う大火事。大規模な、火災だ。
締め付けられるような胸の痛み。鼻に付くような生き物が焼ける臭い。
瞳に映る赤々とした光に、戦慄（せんりつ）が走る。
唐突に、黒煙の柱が、炎を纏った。一本に合わさり渦を巻く。
カナデはそれを見た。渦巻く炎を操る人影を。炎に照らされた右目

は街を、左目は時計模様を、うっすらと、よりはっきり浮かべるソレを、カナデはどこかで見た気がする。
輪郭、肩幅、背丈まで。無表情で冷たい口元。

――誰だろう？

宙（そら）にとどまったまま、カナデは立ち尽くした。

街を焼き尽くしているソレが、何かしらの言葉を発する。ソレの右目に映った景色が変わる。
子供達が映った。中学生くらいの男の子達だ。火災から逃れるため、灰塵（かいじん）と化した街を出ようと、懸命に走っている姿だ。

ソレの左目の紋章が、ゆっくりと回転を始める。針がスピードを上げて回る。

加速。

カナデは、ソレに向けて突っ込んだ。

考えたくもないことが、現実となる前に。

「やめろー！」

叫んだ。拳を振り上げた。顔面に殴りかかった。
だけど、無情にも、とらえた感触無くすり抜け、代わりに、ソレの呟きだけが、聞こえた。

「時空爆星（じくうばくせい）」

ソレは、はっきりと唱えた。

ソレに映し出された子供達が、爆(は)ぜたのを、カナデは、体がすり抜けるのと同時に、見てしまった。子供達自身が、まるで爆弾のように、他の空間を巻き込みながら、大爆発を起こした。

「うわぁぁあああ！！」

血に染まる右目に、声にならない悲鳴をあげたカナデは、布団を思いっきり捲りあげた。おびただしい冷や汗が流れているのが分かる。背中を伝っている。

「何だったんだ、今のは」

呼吸を整え、近くに置かれたタオルに見つけ、額の汗を拭いた。

——あれ？どんな夢だったっけ？

何故か思い出せない。これほどはっきりとした夢なのに、恐ろしい夢だったことは分かるのに、時間が経つにつれ、ますます薄れていく。だけど、あの呪文だけは、妙に耳に残っていた。

「気がつきましたか？」

女性の声に少し驚いて、カナデは顔をあげた。
ベッドに備え付けられたカーテンを捲る音が、部屋の中で響く。入ってきたメイドの手には、水が入ったガラスのコップ。
顔の様子を見たカレンは、カナデの表情に安堵の色を見せた。
カナデは、カレンからコップを受け取り、水を一口飲んだ。

喉を通って、胃に入って行く水が、カナデの脳内で、気絶する直前の記憶を呼び覚ます。
少しずつカナデの顔が青ざめる。自分の魔法で、とんでもないことをしでかしてしまったことに。

「あ、あのさ。体育館の修理代って……」

天井破壊。
ドア粉砕。
つまり全壊。
意図せず起きてしまったことだが、自分のせいで、こうなってしまったのだ。
当然、賠償問題になってもおかしくない。

「それは……」

カレンが言いかけた瞬間に、医務室のドアが、壊れるかのような音をたてて開いた。
現れる暴君に、思わずカレンはひきつった笑みを浮かべる。

「その償いは、わたくしの奴隷として、一生涯働くことですわ！」

指でカナデを突き差し、勝ち誇った顔のミライに、カナデは呆気にとられ硬直した。

「さあ、奴隷の誓いをしなさい！跪き（ひざまず）、わたくしの足を、今すぐ丁寧に舐めなさい！」

今度は地面に指差し、素足を前に出す彼女。これでも一国の姫君。
次期女王。こんな変態暴れ馬に仕える、今は片手で目を覆っている
カレンを、カナデはひどく哀れに思った。

八節　騎士勲章（前編）

窓の外に映る全壊した体育館。内部の金属が剥き出しになり、もはや原型をとどめていない残骸。
これが魔法の力。この魔法という超常現象に、カナデは改めて恐怖を抱いた。

「最初は誰でもこんなものですよ。ただ、気絶してしまうほど、保有する全ての魔力を放出し続けたのは、カナデさんが初めてですけど」

魔力保有量。
あまりにも漠然としたもので、今まで確信はできなかったが、予想通り、ＲＰＧゲームでいうＭＰ（マジックポイント）と考えて良さそうだ。ＭＰがあれば、魔法が使える。概念は体力と同じものだろう。
だが、一つ疑問が残る。
ゲームの世界では、ＭＰが尽きたとしても、戦闘不能になることは無かったはずだ。

「前にも言ったように、全ての物質は魔素で、できています。魔法を使う、とは、魔素を動かすことをいうのですが、保有する魔素の量が、ある一定以上減少してしまうと、術者はショック状態になってしまいます。普通は気絶する前に、魔力の放出は自然に終わります。体内に魔素をとどめておこうと、脳が勝手に行うのですよ」

少しだけ、カナデは、自分の認識に誤りがあったことを自覚した。
体力と魔力。
どちらも使い果たすことがあってはならない。いや、この世界において、体力と魔力に違いは無いのかもしれない。

体力と魔力は別物と考えるより、体力＝魔力と考えたほうが良さそうだ。

「……俺の世界には魔法なんてものが無かったから、その自動調節機能が、働かなかったってわけか」

「そうです。そして、これはかなり危険でもあります。しっかり制御できるようにならないと、最悪の事態にもなってしまいます」

物質の最小単位は魔素である。この世界に来て、初めてカレンから習ったことを、カナデは思い出していた。もし、自分自身の身体も魔素の集合であるならば、身体を崩壊させてまで、魔法を行使し続けることも可能なのだろう。

カナデ自身、別世界の理で育ってきたので、ほとんど実感は無いが、カレンが危惧する事態は、カナデが思う以上に、深刻で危ういものだ。

全速力でダッシュをして、体力が尽きたとしても、途中で息を切らし、疲れた、と自覚することで死ぬことは無い。

普通の人ならば、これが魔法に当たるのだが、カナデの場合は、疲れた、という自覚をすることができないからだ。

「つまり、あなたが魔法を使うと、いろいろ爆発して面倒なのですわ！誰かに飼われて生きるしかない。一生をわたくしの肉奴隷として生きていく決心は、できましたかしら？」

思わずカナデは吹き出しそうになった。カレンの顔が真っ赤になり、こっちに話をふるな、と訴えてくる。

仕方がないので、いろいろ頭が爆発している本人に、

「……あのぉ～ミライさん？肉奴隷の意味を知っていて言っているのでしょうか？」

と聞いてみた。

「あら、犬のように働くペットのことですのよ。少々、破廉恥な下僕民には難しい言葉でしたわね」

彼女は自信満々で言った。重要な部分が、もののみごとに欠落しているのも知らずに。

「破廉恥はお前のほうだわ」

ボソッと呟いたカナデはカレンを見る。目で訴える。教育係としてこれで良いのか、と。

「もう手遅れです」

主には聞こえないメイドのため息から、カナデは、今までの大変な苦労を感じ取った。

凛々しく突っ立っている彼女の変態発言は、今に始まったことではないのだろう。

「長居しすぎましたわね。カレン、こんな破廉恥な奴隷はほっといて、もう行きますわよ」

そして彼女は、まわれ右をして、医務室を去った。その後を、カナデに向けて苦笑いを浮かべ、お辞儀をしたメイドが続く。

振り回されっぱなしのメイドに、苦労の終わりが来るときはあるの

だろうか。

「まず無いな」

自問自答をしたカナデは、再び寝付こうと、横になったとき、扉の開閉音が、新たな来訪者を知らせた。

「やぁ、クリスタラードの勇者よ。学校を爆破した気分はどうだ～い？」

相変わらずのマントと、金髪を風になびかせ、手には大量の色とりどりな花が詰まったバスケットを持ち、満面な笑みでラスターは現れた。

「……また、めんどくさいのが現れた」

「全く……名のある貴族が、わざわざ来てあげたというのに、なんて言いぐさだよ。魔法で殺されても、文句は言えないぞ」

ラスターは魔法が使えないだろ、という言葉を、カナデは飲み込んだ。

「で、何のよう？」

「あれ、聞いてないのかい？今夜、騎士勲章の授与式があるってことをさ」

――騎士勲章。

王に認められる証のうちの一つであり、クリスタラード中の、騎士

を目指す貴族の憧れ。
貴族達にとっては、喉から手が出るほど欲する名誉だ。
勲章を与えられた者は、王族直属の部隊へと配属され、家族はもちろんのこと、親族に至るまでの安泰が約束される。

「もっとも、フンボルト家のような大貴族にとって、金銭的なことなんか、どうでもよいことなんだけどね」

「なら、何でラスターは、ダイダロスに挑んだんだ？魔法も使えないのに、あまりに無謀じゃないか」

「君は本当に貴族なのかい？名誉だよ名誉。目の前に転がっている宝石を、みすみす放っておくわけないだろう。それに、勘違いしているようだが、竜召喚の魔法に失敗したのは偶々さ」

「だからって、自分の命よりも名誉の方が大切なのか？」

「だから、僕はこれでも一流の魔導師家の端くれ。今回は、偶々失敗しただけだよ」

カナデが胡散臭そうな顔をすると、ラスターはさらに、本当に偶々なんだ、と抗議した。

「全く君って人は……」

ため息混じりで、ラスターは呟いた。

「って、そんなことより、騎士聖堂へ、そろそろ行くよ」

「行くって、俺もか？」

目を丸くしたカナデに、ラスターは再びため息を吐く。

そこには、呆れと驚き、ラスターは無自覚だが、羨望すら含まれていた。

「何を言っているんだよ。今日の主役は、ドラゴンを倒した君じゃないか」

カナデには聞こえない声で、ラスターは呟いた。

八節　騎士勲章（後編）

ハルモニア国立魔法学校の敷地内にある騎士聖堂。広大な土地を持つ魔法学校だが、騎士聖堂自体も巨大であり、天辺の水晶を模したシンボルが目立つ白塗りの建物だ。遥か昔、ルチア・フォーマルハウトの時代より築かれた聖堂には、王族フォーマルハウト家の先代達が祀られている。

カナデとラスターは、白い廊下とオレンジの光の中、自分達が呼ばれるのを待っていた。

天井から射す、夕焼けの光は、ステンドグラスに描かれた人々を映し出す。数えて見ると、全部で１５人。最初の人だけ女性で、残りは男性だということに、カナデは気づいた。

「ラスター、あそこに映っている人って？」

「あれは代々ハルモニアを治めてきたフォーマルハウト一族の顔だよ。初代ルチア様から順に、１５代目アウストリヌス様まで、描かれているのさ」

「あれがルチア……」

この世界の人達が、偉人だ、と崇め敬愛した伝説の人物。その姿を初めて見るカナデだが、彼女は他の人達に比べて、確かに別格だと感じた。若々しく凛とした表情の彼女は、ステンドグラスの向こうにいるにもかかわらず、こちらまで、強き意思の鼓動が伝わってくる。青き髪は水晶を連想させ、全身から溢れ出すオーラは、太陽の光のごとく、まばゆい限りだ。

「ルチア様は、争いの絶えない世界を3つに分断し、新たな世界を造ることで、僕達海の民を護って下さったんだ」

「世界を分断した？」

「そうさ。エトワール教の教えでは、もともとこの世界は、海の民、天の民、地の民がいて、一つに纏まっていたんだ。だけど、傲慢で野蛮な地の民は、世界を我が物にしようと、百年にも及ぶ争いを起こした。そのとき、突如として現れたのが、魔獣と呼ばれる生き物で、魔獣達は破壊の限りを尽くし、世界は混沌としていった」

「そこに救世主の如く現れたのが、ルチア・フォーマルハウトってことなんだ」

伝説となっているルチア・フォーマルハウト。その人物の影は、ハルモニア全体に広まっているエトワール教という宗教にまで見てとれる。いや、少し認識が違うのか。エトワール教が、ハルモニアの国教であり、戒めであり、国自体を形成する支えでなのであろう。もちろん、今回の騎士勲章も、エトワール教に定められた、しきたりの一つだ。

――如何なるときも美しくあれ。

ふと脳内を過った言葉は、エトワール教の聖書の一番初めに出てくる、フォーマルハウト家の家訓となっているもの。

ただ、反対に、少しだけ寒気も感じる。

果たして、エトワール教以外の宗教は、認められているのであろう

か。
地球において、キリスト教とイスラム教が、またはその宗教の一派同士が、対立しているように、そういったことは、ハルモニアでは起きてはいないのであろうか。
――それを考えるよりはまず、もう少しエトワール教についての知識を得るのが先か。
ルチア・フォーマルハウトの威厳に溢れた顔から目をそらし、カナデはラスターに質問した。
「天の民や地の民って本当にいるの？」
「さぁ、どうだろうね」
首を傾げたラスターは、カナデに近寄り、声を潜めて話を続ける。
「ただ、噂によると、一部の人達は、定期的に天の民と交流を取っているらしい。あくまで噂なんだけどね」
一部の人達。それが誰のことを意味するか、大方予想できる。１５枚目の写真の人物が、知らないはずもなかろうことも。
ふいに、鐘の音が鳴った。
ゴーン、ゴーンと二突き。感慨深げに。胸の奥が、揺れ動く。
思わず目を見開いた。
１５枚の写真達が、一斉に左右に別れ、壁だと思っていた場所が、奥に向かって動き出した。
レッドカーペットが敷かれた地面と、両サイドに立つ大勢の騎士達。

神殿の天井を覆い尽くすステンドグラスには、巨大な青い鳥が描かれている。

――美しい。

同時に、緊張の波が、一気に押し寄せる。気づかぬうちに、ラスターは先を歩いていった。遅れてカナデも歩き始めた。
ロボットのような、ぎこちない動きで。自分がこんな場所で表彰されても良いのか、自信が無くなってくる。

少し顔を上げると、一番奥の玉座には、青色のドレスを着た少女がいた。

水晶で出来た、青き鳥を模した冠を被った彼女は、どこか不満そう。

――如何なるときも美しくあれ。

脳内のミライが繰り返した言葉に、なぜだか、カナデは申し訳ない気持ちになった。そして、自然と胸を張っていた。
顔を上げて、堂々と、この場に立つことが誇らしげに。
今の瞬間、自分にできる最大限の芸術は、自分を誇りに思うこと。
美しき彼女から、勲章を貰うため、ただまっすぐ、エメラルドの瞳を見つめて歩く。

ステンドグラスの青き祝福のシャワーを浴びて、カナデはミライの前へと進み出た。

気づいたときには、不満そうな瞳は、いつの間にか、微笑みへと変わっていた。

それは、どんな芸術よりも美しく、華麗なもの。初めて出会ったときも、ダイダロスに立ち向かっていったときも、そして今回も、それは魂を抜かれたような錯覚を覚える程に。

自然とカナデは、ミライの前に跪ずいた。
すっと右手を、ミライは差し出す。そっと、その手に口付けを。
これは忠誠の証。手を離し彼女の顔を見上げると、カナデは照れ臭くなって頬を朱に染めた。

「この度の汝の働き、誠に見事であった。汝の働きにより、我がハルモニア王国は、かつてない危機を乗り越えられたのであろう。ここに、民の代表として感謝を添え、勲章を授与する」

彼女の凛とした声が、教会中を木霊した。
振り返り、台座に置かれた剣を、彼女は右手に持った。

ステンドグラスからの青き光を乱反射させる刀身。
天に掲げ、全体を人々にさらけ出す。そして、刃先をカナデへと突き出し、腕を折って刀身を向けた。

「剣の名はフローズヴィート。汝が騎士であり、汝が民を護る証なり」

無意識に、カナデは両手を差し出した。
質量を持った剣が、手に置かれる。今尚、光放ち続ける剣。
ずっしりとした感触が、手を通し、神経を伝い、脳に浸透する。
それは、ただ単に剣が重いということでは無かった。

「汝の名はトキソラ　カナデ。汝、騎士として、我らハルモニアの剣となり盾となると誓うか？」

美しき彼女の声に併せて、もう一つ、心に新たな誓いを立てる。

この美しき彼女の剣となり、脅かせる存在からは盾となり、

そして――

「誓います！」

「その言葉、しかと受け止めた。今後とも、より一層の努力に期待する」

――未来永劫護り続けられる翼になろうと。

九節　もう一つの誓い

「お父様。これはいったい、どういうお考えですの」

エメラルドの瞳から出る眼差しは、真剣そのもの。だが、父――アウストリヌスは、怖じ気づくことなく、娘の問いに答えた。

「なに、大した考えなんか無いよ。私はもう老生の身。次世代に剣を託しただけさ」

フォーマルハウト城東の塔、最上階。王室の間のさらに奥には、天井がガラス張りのバルコニーがある。外からの日差しに照らされた、真っ白なテーブルを挟んで、父と子は久しぶりの会話を楽しんでいた。

「ですからって、お母様の形見のフローズヴィートを……」

ミライは、ため息をついて、メイドに手渡された紅茶を一杯口にした。自分の中に母の記憶は無い。母は、破晶姫として散った、と父から聞いている。その時に目にしたのがフローズヴィート。母が、最後に残した強き遺産。

――それが、よりによって、なんで、あんなケダモノになんか……

甚だ疑問に思うこと、この上ないのである。

「フローズヴィートも喜んでおるだろう。フェンリルと共に肩を並べ、背中合わせになる日が来るのだから」

「そそそそんなわけ、あるわけが無いじゃないですかぁ！」

バーン、と机を両手で叩きつけ、ミライは叫んだ。この際、不作法なんてものはどうでもよい。カレンの呆れ果てた視線も気にしない。国王とは到底思えないような、薄気味悪くニヤニヤと笑う父親のぶっ飛んだ桃源郷を、粉々に打ち砕くのが先決だ。

「わたくしが、あの不埒者と肩を並べると？お父様、冗談も大概にして下さるかしら！このわたくしが、なぜあのような者に、ふしだらかつ、人間的に致命的な欠陥を持った思考をもたなければならないのですかぁ！」

「その人間的に致命的な欠陥を持った思考とは、カナデ君との色恋沙汰を示唆するのかい？何か勘違いしているようだが、私は一度も、肩を並べるが、そういった関係になるとは言っていないよ」

クスっと、メイドが笑ったのは気のせいだろうか。父に一本取られてしまったミライは、呆然と立ち尽くし、おもむろに椅子に座った。

――わたくしとしたことが、こんな簡単な口車に乗せられてしまうなんて……って、なんでこのわたくしが、あんな犬以下の男のことで、こんなに取り乱さなくてはならないのですかぁ！

と、内心ぼやいてみたところで、脳内にいるメイドのクスクス笑いが、とまることは無い。

とりあえず、現実のメイドに一睨み。

意図した通り、彼女は反射的に一歩後ずさった。

それに満足して、自分を取り戻したミライは、我を落ち着かせ、未

だニヤニヤ笑う父に言った。

「えぇ、そうですわね。わたくしとしたことが、とんだ失言をしてしまいましたわ。最近騎士達の間で流れている噂に、少々動揺していたみたいですわね」

「そうかい、そうかい。それなら、それで仕方ないことだね」

「そう、本当に、至極まことに仕方がないことですわ」

一人深くうなずき、ミライは、犬以下についての話を終わらせる。これ以上話したところで意味が無いし、そもそも不愉快にほかならない。

「さて、お父様。今回はどちらへお出かけなさっていたのですの？」

父であり、ハルモニアの国王であるアウストリヌスは、しばしば出かけることがある。

地方都市を訪問したり、軍の式典を訪れたりと、その用件は、年間だけでも二桁はいく。

「アストラエアのところだよ。ちょうど今年が、あの国への定期訪問の年だからね」

この世界には、ハルモニア以外の国は存在しない。別世界、かつてミライが一度だけ行った世界。目を輝かせ、身を乗り出して言った。アストラエアで思い当たることといえば唯一つ。

「スピカのところにですか！？お父様、スピカはどんなご様子でしたの？」

「あの子はおしとやかな子になったよ。ミライとは違う感じだけど、ずいぶんと品のある、よい女性に。もちろん、天空の神、シナトから受け継いだ聖獣魔法（エクススペル）も、使いこなせるレベルに達し、かなりの魔導師にもね」

遥か古代、ルチア・フォーマルハウトの時代より伝わる古代魔法、聖獣魔法（エクススペル）。魔法が系統だてられ、ほとんどの謎が解明されている今日だが、その中には、未だ説明が付かない魔法も数多く存在する。聖獣魔法（エクススペル）もその一つ。曰く、神の使いである聖獣と契約し、力を授けられているのだとか。

「どうやら引き分けですわね。最後に会った日、どちらが先に秘術を使いこなせるようになるか、勝負していましたのに」

こうは言うが、ミライは嬉しかった。スピカが、自分と同じように、魔法を操り、民を護り抜いているであろう光景が、目に浮かぶ。幼い時、あれは五歳頃だろうか、一度しか会ったことがない友人だが、今尚、彼女と過ごした記憶は鮮明に残っているのだ。

「近いうち、ミライには、一人で天に行ってもらうかもしれない」

突然、アウストリヌスは小さく呟いた。ミライは、目をまん丸にさせ、驚く。それほどまでに、衝撃的な発言だった。

「な何を言ってますの？過去の過ちを繰り返さぬため、基本的に天とは、互いに不干渉でいるのが、流儀ではなくて？」

交流してはならない世界。あのとき、もっとスピカと遊びたいと言って、父を困らせた。初めて出来た友達との別れは、小さな自分に

とって、あまりに不合理な話しだった。
今まで、ずっと一人でいたのだから更に一層……
その後、カレンと出会うまで、一人枕を濡らしたことが、幾度とあった。

「もちろんその通りだとも。だが、最近の不穏な空気が、もしかしたらそうさせてはくれぬかもしれん」

「不穏な空気と言われれば……もしかして、ルベロ・オルトロス率いるテロリストのことを言ってますの？」

先週、クリスタラードを襲撃した三体のダイダロスは、ルベロ・オルトロスの仕業。実際、こういった事件は、今回が初めてではないことを、クリスタル騎士団の報告から、ミライはよく知る。

「空の世界でも、テロ行為が盛んに行われているみたいなんだ。ただ、あっちは統一国家じゃないから、もしかしたら他国の仕業なのかもしれないけどね」

天と海。エトワール教に書かれた内容は、ルチア・フォーマルハウトが、世界を三つに分断したという話。
天の民と地の民の世界は、知らないが、海の民の世界の話だけで考えると、この世界は、ルチア・フォーマルハウトによって、ハルモニア王国一国で統一された。

文献を探ってみると、当時は、もっと多くの国があったようで、中には敵対関係にある国もあったらしい。
あまりミライは知らないが、ナイレアラ家は、最後までハルモニアと争った強国で、今でも残党が暗躍しているみたいである。

「もし、私やハルモニアになんかあったら、ミライはすぐにアストラエアのところへ行っておくれ」

「お父様！縁起でもないことを言うものではありませんわ！それに、わたくしはハルモニアと運命を共にする定めにありますのに。わたくしが一人逃げ出してしまったら、この世界は滅んでしまいますのよ」

一瞬だけ、ミライの瞳が曇ったのを、アウストリヌスは見逃さなかった。ミライの宿命は、破晶姫の宿命。破晶姫の宿命に散った、ミライの母であり、自分が愛したあの人を思う。だからこそ、出来得る限りのことは尽くす。二度と、同じ絶望を経験しないために……

「大丈夫。あの時まで、まだ時間はある。ミライ、私と約束しておくれ。そうでないと、私は、王の命令をしなければならなくなってしまう」

「もう……分かりましたわ。天に行くだけならば、わたくし個人にとって、そう難しいことではありませんからね」

「そう言ってくれるとありがたいよ」

「ですがお父様、死に急ぐことは、絶対にあってはなりませんからね！」

ミライの言葉に、アウストリヌスは優しく微笑んだ。
その胸の奥で、彼は誓いを立てる。カナデが式典でしたように、彼もまた、かつては失敗した誓いを立てる。まだ、自分は死ぬときではない。自分の最期は『そのとき』までとっておく。それ以外、考

えたりしない。

再び合いまみえた『そのとき』こそ――――

十節　終わりの始まり（前編）

カナデが騎士勲章を受け取ってからしばらくがたった。それまでの間、ハルモニアの時は平和に流れ、ダイダロス襲撃のような緊迫した事件が起きることはなかった。
だが、カナデにとっては、まさに地獄のような日々を送っていた。

「これくらいで、くたばっていてはどうしますの？しっかりしなさい！」

もちろん原因はこの少女。
わがまま姫様に他ならない。

ふと、あっちの方向を見てみると、ラスターとカレンが、手を取り合って、奇妙な言葉を復唱していた。

「次！行きますわよ！」

言葉より早く、光る剣がまさに光の如く疾走してくる。カナデは横っ飛びで回避。対象を失った剣は、地面を炸裂させた。

「ちょっと待ったぁ！」

大穴が空いた地面に、思わずゾッとする。同時に、本気で殺す気だったのか、と反動を利用して華麗に着地したミライを見て言った。

「手加減したとはいえ、わたくしのクリスタルパルスを回避するとは、少しは進歩したようですわね」

魔剣フェンリルを消失させたミライに、カナデは生唾を飲んで訴える。
無駄だとは思うが……
「魔法を使うなんて、汚いぞ！」
「何か言いましたか？まさかとは思いますが、わたくしの、はは裸を見たことを、忘れていて？」
「……ずいぶんと根に持っているんだな」
「当たり前ですわ！犬以下の外道が、美しきわたくしの肌を見たのですわよ！通常ならば、裁判無効の即刻死刑ですわ！」
犬のようにうるさいのはどっちの方だ、とカナデは思うが、決して声に出したりはしない。犬が狼になりかねないからだ。
横目で向こうを見てみると、カレンと未だに呪文を復唱しているラスターが、異様に羨ましくなってきた。
魔導師志望のラスターは、もちろん魔導師の指導を受ける。クリスタル騎士団唯一の魔導師はカレン。ということで、カレンからマンツーマンで、ラスターは指導を受けているのだ。
――俺も魔導師志望だったのに……
だが、それは不可能だった。手に持つ白剣をみて、カナデはうなだれる。
ミライから、フローズヴィートを渡された時点で、カナデは剣士志望になってしまった。もちろん否定した。

当然の如く、

「わたくしから剣を貰っておいて、今さら魔導師になりたいとでも？粉々になりたいのですか？」

僅か一秒足らずで、カナデの請願は切り捨て去られるのだが。

そんな回想をしていたところ、ふと放たれる殺気に気づく。殺気は青白くなり、光は集束し、剣は冷気を伴う。

はっとしたカナデは、ミライの方を急いで向いた。

「さっきから、何をカレンばかりじろじろ見ていますの？」

「え……あはははは」

笑ってごまかすも、一筋垂れた冷や汗が凍りついた気がする。一歩ずつ近づく青き鬼神。

この際青鬼で良いではないか、と一人突っ込みするのも虚しい。それくらい、危険を感じる。

「分かったごめん。ちゃんと練習するか……」

「こんなにも美しいわたくしという尊大なお方がいらっしゃるというのに、どうして二番のカレンに目移りしているのですか！甚だムカつきますわ！」

「えっ……そっちなの？」

「他に何があると言うのですかぁ！！」

次の瞬間には、再び地面が炸裂していた。横っ飛びで回避したカナデは逃げ出す。それを追いかける青鬼。時折地面をふっ飛ばしながら。

「カレン？あれはいったい何の練習なんだい？」

連続する炸裂音に顔をひきつらせたラスターは、同じく顔をひきつらせるカレンに聞いた。

もっとも、カレンに分かるはずもなく、

「ミライ様オリジナルの新しい調教……いえ、教育の仕方ではありませんか」

というのが精一杯。それでも、ラスターよりはいくらか耐性があるカレンは、揺れる地面の中でも練習を続けようと促す。

「良いですか、ラスター。あなたが、今まで得意としてきた魔法は、生命創造ではありません。おそらく虚構幻影の魔法です」

「ま、まさかぁぁ……フンボルト家に伝わる魔法では、確かに生命創造だと」

「えぇ、本来ならばそうでしょう。ですが、あなたの魔力コントロールでは、幻影を生むのが限界。そもそも生命創造なんていう極めて高度な魔法は、術式以外にも、ある特殊な能力があるのかもしれませんし」

「僕には能力がないと……」

「残念ながら今はまだ」

落ち込むラスターに、カレンは話を続ける。

無から魔素を集め、物質を作り出すこと自体が最上位の難易度をほこる魔法の一つ。にもかかわらず、生命までも創造しようというのは、たとえ限定的な時間内であったとしても、通常ならば不可能に近いこと。

フォーマルハウト家の者だけが使える結晶秘術と呼ばれる魔法形態のような、ある特殊な血筋を持った者に限定されると推測できる。もちろん、さらにその中でも、飛び抜けて優秀な者でないと生命創造などといった魔法は、使えないはず。

ラスターのように、無から幻影を生み出すことですら、カレン自身は不可能なことだと思っている。

だが、カレンがこう説明したところで、ラスターの目線が上を向くことはなかった。

理由ははっきりしている。

ラスターの兄が、実際にドラゴンを召喚してしまうことが、彼のコンプレックスとなっている。

兄だけではない。他の兄弟も、成人した親戚達も、ドラゴンほどではないが、何かしらの生物を召喚できる。一族の中で、唯一まともな幻影すら出すことができないラスターは、まさに落ちこぼれのレッテルを貼られていると思っているのだ。

そんなことを、カレンが知るはずもないし、知るよしもない。自分の魔法をおおっぴらに自慢するような者など、いるはずもない。自分から魔法のトリックをばらすほど愚かなはずがないからだ。

だから、事情を知らないカレンが、それほどラスターの落ち込みを

真剣に考えることはなかった。

十節　終わりの始まり（後編）

「それではカナデ君に質問をしようか。いきなりだが、君ならばどちらの道を選ぶかね。生と平和と善の中、運命の赤い糸を葬り、多くその他の人を救済する道。それとも、死と戦争と悪の中、多くその他の人を窮地に陥れ、運命の赤い糸を延命する道。何、気にする必要はない。直感で答えておくれ」

「えぇっと……後者は恨まれそうだからパスで、前者は英雄になると平凡な暮らしができないからパス……って、ここは僕の部屋なんですけどー！親子共々、僕のプライバシーは完全無視ですかぁ？」

鬼畜なレッスンから、くたくたで自室へと帰ってきたカナデは、扉を開けた瞬間に見えた、にこやかな顔にげんなりした。

ハルモニア国王アウストリヌス・フォーマルハウトは、娘、ミライ・フォーマルハウトの塔の、ある客部屋で、どこからか持ち込んだ芳香漂う紅茶を飲んでいた。度々彼とその娘は、自室へと無断で侵入してくるので、この臭いにはすでに慣れている。

慣れてはいけないはずなのだが。

「ふむ。それは娘がカナデ君のことを気に入っている証ではないのかい？実際に、私はカナデ君のことを、とても魅力がある人物だと思っているからね」

「理由になってませんけど！」

このファンタジーな世界、偉い人は偉いほど、頭がどうかしているのだろう。

国王に姫君に、ラスターとかいう良く分からない貴族といい、やは

り頭のネジが何本か抜けている。無駄に地位が高いがゆえに、ネジを回してくれる人さえいないようだ。

「人を気に入るのに、理由なんてものがあると思うかね？こういうのは相性だよ、カナデ君。それにこの私が言っているんだ。老体とはいえ、目まで死んではおらんよ」

ベッドに腰をかけるよう促し、湯気が立ち昇るあつあつのマグカップを手渡しながら、アウストリヌスは言った。

――ここって俺の部屋だよね？なんでお茶渡されてるの？そんでもって、鬼畜レッスンの後に、熱い飲み物はあまり嬉しくないのだが……

なんて思っていると、みるみるうちに紅茶は温度を下げ、アイスティーへと生まれ変わった。カナデが唖然としていると、アウストリヌスは自慢気に言った。

「不思議に思ったかい？このマグカップには魔法がかけられていて、飲む人の気持ちに応じて、熱くも冷たくもなるんだよ」

これまた便利な道具である。近年になって発明されたマグカップは、まさに即席の冷蔵庫といえるだろう。魔法による文明の開化を掲げた政策より産まれた品の一つだ、とアウストリヌスは言う。

ごくりと一口、紅茶を口に入れてみる。

なるほど、確かに美味しい。紅茶の知識など素人だが、香りといい間違いなく高級品だ。

「それで、いったい何をしにきたんですか」

疲れた後の冷たいお茶の心地よさに浸りながら、カナデは言った。

「少し話をしたいと思ってね。エトワール教についての話だよ」

アウストリヌスの口から思わぬ言葉が出てきて、カナデはかなり驚いた。

自分が知る限り、アウストリヌスの思考は、現代日本に近い現実主義者（リアリスト）より。

この不思議なマグカップの件といい、政策を加持祈祷（かじきとう）なんかで決めたりはしないだろう。

確立された理論の基に、政治が行われているのは明白である。

「エトワール教は、この国の国教なんだ。カナデ君の国にも宗教というものがあるだろう」

「えぇ……まぁ」

宗教と言われると、カナデにはあまり良いイメージは無い。

むしろ、戦争に利用されたり、偏見の道具だったりと、ネガティブなイメージがつきまとう。

そして、この世界においてもまた、注意しなければならない事柄だと思っていた。

「カナデ君は疑うかもしれないが、エトワール教の聖書には真実も含まれているんだ。例えば、赤色の超魔竜リヴァイアサンとか、耳にしたことはあるかね？」

「ええ、確かルチア・フォーマルハウトが倒したっていう伝説の竜の」

「正解。カレンが教えたかな？だが、本当の真実は、そうではないんだ」

少しの間。

そして次のアウストリヌスの言葉に、カナデは目を見開いた。

「リヴァイアサンは、まだ生きている」

アウストリヌスは、右足の裾を捲ってカナデに見せた。

カナデは、つばを飲み込んだ。膝から全部、ピカピカな金属の義足だった。

膝の部分から上は、どす黒く変色している。

「およそ一五年前、リヴァイアサンにやられた傷だよ。死の黒炎が、私の右足を焼き付くした」

裾を下ろし、淡々と話すアウストリヌスは、どこか切なげで、後悔さえも感じられる。

まるで右足の傷が、アウストリヌス自身の心を現しているように。

だが、アウストリヌスの表情は、再び明るいものになった。

「とにかく、エトワール教は、ただの宗教ではないんだ。ある事実に基づいて、作られているんだよ」

「そう言われると……」

よく考えてみれば、それもそうか、と納得がいく。地球にある宗教

が、ファンタジーなものであるのと、ファンタジーな世界の宗教が、ファンタジーであるのとは、少しだけ意味合いが違う。

「そこでだ、カナデ君。これから、もしも任務で出かけたり、旅立つことがあったりするならば、是非ともやって貰いたいことがある。エトワール教について、他の地でも調べてきてはくれないか？もちろん、これは私個人の頼みだから、命令なんかではないし、ちゃんと報酬も出す」

エトワール教について、興味がないわけではない。見聞を広めるのは、好きな方だが、頼んだ相手が厄介でもある。

カナデが、どうしようか迷っていると、アウストリヌスは、ぼそっと言葉を付け足した。

「これで、娘の裸を覗き見たことをチャラにするチャンスでも……」

「はいはい。やりますよ、やります～！まったく、本当に親子して性格悪いですよね！」

「私とミライは親子だからね。似ていて当たり前だし、その言葉は、誉め言葉として受け取っておくよ」

悪戯な笑みを浮かべて、アウストリヌスは部屋から出ていった。はた迷惑な話しだが、マグカップやら紅茶やらが、置きっぱなしなのは、また来るという意味だと理解しているので、気にする必要はない。

それでも、一つだけ、カナデには納得がいかないことがあった。

リヴァイアサンについてである。あれだけの化け物が、出現していたというのに、巷では倒されたことになっている。カレンでさえも、

そうだと言っている。とても、変な話だ。
気味が悪いと感じたが、カナデはいつの間にか眠っていた。
毎日のハードなトレーニングが、カナデの思考を止めていた。
もしかしたら、アウストリヌスの意図したいことに、気がついたかもしれないのに。

次にカナデが目覚めたとき、窓の外は、漆黒の紅に輝いていた。

一一節　襲撃（前編）

ミライ・フォーマルハウトは、自室で、魔法のトレーニングに勤しんでいた。
扉の位置に立ち、扉から三十メートル以上離れた先にある、マグカップに意識を集中させる。マグカップの中には、小さく波紋を広げる紅茶。
その波紋は、ゆっくりと大きくなり、紅茶の内部が固まり始める。
そして、次の瞬間には、マグカップごと結晶化して、割れてしまった。

「はぁ、また失敗ですわ。カレンに教わったこのトレーニング、なかなか上手くいきませんわね」

魔力量、魔法の威力、機動性、接近戦から遠距離戦と、全てにおいて優れているミライだが、魔法のコントロールだけは、唯一苦手としていた。苦手といっても、常人よりは優れているのだが、ミライは、決してそれを良しとしない性格。
真の美しさを求める芸術者（アーティスト）は、完全無欠を目指し、また、自分はそうでなければならないと、ミライは考えているので、少しの弱点も許したりはしない。そこで、カレンに紹介されたのが、このトレーニング。遠距離から、中の液体だけを結晶化させて粉砕するという、極めて難度が高い訓練だ。

「このままでは、高位魔法の詠唱破棄といい、カレンに、魔法で勝てませんわね……いいえ、勝てないのではなく、勝たなければならないのですわっ！」

意気込んだ勢いで、叩きつけられたティーポットが音を立てた。新たなマグカップには、紅茶がなみなみ注がれている。
ミライが離れ、集中し、紅茶が光ると、マグカップが割れる。
ここで、なぜマグカップなのか、そして、わざわざ高級な紅茶を使うのは、なぜなのかを、彼女に聞いてはならない。
しだいに増えていく、粉砕された結晶マグカップ。割れ方が、少しずつ激しくなっているのが、目につく。
普段なら、これが、かれこれ何十回か続くと、自然とカレンがやってきては、慰めてくれる。
普段なら。
なかなかやって来ないカレンに、ミライは逆に冷静になった。カレンが、ミライの就寝の時間を間違えるはずがない。朝寝坊防止のため、といつもなら、もうとっくに夜更かしを咎めに来ているはず。なのにやって来ない。
――胸騒ぎがする。
そう思ったときだった。
けたたましい鐘の音が、フォーマルハウト城に鳴り響く。続けて爆発音。窓の外からは、オレンジ色の閃光。城内に、敵襲を知らせるサイレンが流れる。
騒然とするミライだが、行動は、信じられないほど早かった。ひとえに、アウストリヌスからの警告があったからだろう。
素早く鎧に着替える。服や食料、飲み物などは、あらかじめバック

に纏められているので、準備に数分もかからない。それを背負い、足音がする扉の向こう、来るべき敵に備えるべく、フェンリルを構え、護晶鏡壁（クリスタルウォール）で、前面をクリスタルで覆う。

束の間の魔法攻撃。灼熱の火炎が、木製の扉を吹っ飛ばした。破片は、クリスタルの壁に遮られ、ミライにダメージを与えない。

「貴様がミライ・フォーマルハウトだな」

一人の男が、ボロボロになった扉の破片を蹴り飛ばして、ミライの前に出た。紅色のローブと、長い茶髪。顎が出っ張り、彫りが深い男性は、ミライを品定めするように、一嘗めした。

それに対し、気持ち悪いものを見るような視線を、ミライは送る。後ろ手で、フェンリルを軽く振り、剣自体を消滅させることを忘れずに。

「えぇ、そうですわ。このわたくしこそが、かの尊大なるミライ・フォーマルハウト様ですわよ。扉を破壊して、女性の部屋に侵入する野蛮なお方。覚悟しているとは思いますが、ただではすみませんわよ？一応ですが、目的を聞いてあげましょうか」

冷静に言うミライだが、内心は凄く焦っていた。突然の夜襲に。カナデがやってきたときとは明らかに違う、殺気に対して。自慢の長い髪で見えないが、首筋からは汗が垂れている。

「ナイレアラ帝国の命令より、貴様を処刑する」

紅色のローブから、杖をさっと出して、男は構えた。焦っているミライだが、冷静でもある。

焦れば焦るほど、冷静に。

――全ては、いかなるときも、美しくあるために。

「処刑？不可能ですわね。なぜなら……あなたの周りをよく見なさい！貫け！刺晶鏡槍（クリスタルランス）！」

天井が輝く。氷柱になる。先端を鋭く、そして、瞬く間もなく、降り注ぐ。

だが、男の顔は涼しいものだった。氷柱のシャワーが直撃する寸前、男を囲むようにして燃え盛る炎が出現。

「無駄だ。この俺に、晶術などという時代遅れの魔法は通用しない！」

炎に溶かされ、氷柱が男に当たることはなかった。

ミライは動じない。むしろ想定範囲。後ろ手の、右人差し指で、軽く弧を描く。

氷柱が生じている粒子に混じり、より明るく輝く剣が生まれる。

――一閃。

「な……にっ！？」

炎が、ゆっくりと消える。男の足元から血の川が。膝立ちになる男の腹部は、フェンリルに貫かれていた。

「間抜けなこと。魔法に混ぜておいたフェンリルさえも見破れないなんて。もしかして、フェンリルが、そんな、うすのろな炎で焼き

消えるとでも、本気で思っていたのですの？まぁ、死人に口無しですわね」

男の腹部からフェンリルを引き抜いたミライは、さっと一振りして血を払う。

もう一度、男が息絶えていることを確認すると、ミライは足早に、自室をあとにした。

大量の割れたティーカップと、冷めた紅茶が入ったポットを残して。

☆★☆

警報器が鳴り響く闇の中、彼は二人の少女と、玉座の間へと入った。

闇に溶け込むような、漆黒のマントを身につけた彼と少女は、フードを取る。茜色に輝く光が、窓の外から、黒髪、金髪、緑髪を照らした。

彼の方は、まだ15歳くらい。少し喉仏が出て、短髪で、細い少年の顔つきをしている。

二人の少女は、まだあどけない顔をしている。それぞれの髪型はツインテールで、年齢は二桁にもいかないだろう。

「にぃに、あいつが今回のターゲットだね」

一人の少女が、玉座の向こうの足音を見て言った。ツインテールにした金髪からは、時折、電気が放電されている。

こくりと、にぃに、と呼ばれた彼は頷いた。

彼の頷きを確認した金髪の少女は、右手にバチバチと音をたてる光を集め、素朴な笑みを浮かべる。

「そんじゃ、ななより早く、ぶっ殺すねっ！雷法（らいほう）　電撃波（でんげきは）！」

突き出した右手。指先が煌めくと、ジグザグに進む電気が放出される。

それを見た緑髪の少女は憤慨した。

「ララ、ずるいの！風法（ふうほう）　真空波（しんくうは）！」

言うよりも早く、どこからか鎌を具現化すると、緑髪の少女はそれを振るった。刃先から生まれた風は塊となり、刃に生まれ変わり、電撃を追う。そして、対象に、ほぼ同時に着弾すると、大きな爆発音をあげた。

「結晶秘術　縛晶鏡牢（クリスタルジェイル）」

光の粒が、三人を囲むようにして、大量に出現したかと思うと、一瞬にして、クリスタルの牢になった。

金髪ツインテールの少女は、「あ〜あ、捕まっちゃった」、と舌を出して、未だ無表情の兄に微笑んだ。

「どこから入ったかは知らんが、君達はいったい……まさか！？まだ、こんなに幼い子が」

声を失った。足音の主――アウストリヌス・フォーマルハウトは、結晶の牢獄に捕らえられた襲撃者を見て驚いた。まだ幼い二人に。

金髪ツインテールの少女――ララは、にこやかに笑って返答する。その微笑みは、純粋なもの。なのに言葉は、ひどく残酷なものだ。

「あれぇ？生きてたんだ。おっさん、早く死ねよ」

その言葉に、アウストリヌスは絶句する。信じられないといった表情。緑髪の少女――ななは、アウストリヌスの顔色を楽しむようにして笑った。

そんな二人に挟まれ、今まで無言だった少年は、ついに口を開いた。

「はじめまして、とでも言っておきましょか。アウストリヌス・フォーマルハウト国王陛下。あなたの命を頂戴したく、我々は参上しました」

クリスタルの檻の中で、丁寧に頭を下げた黒髪の少年に、アウストリヌスは戸惑う。

「君はいったい何者だね。私を殺して、いったいどうなるというんだね」

「ナイレアラ家に雇われた、とでも言えば、分かって貰えますかね」

アウストリヌスは、ほぞを噛んだ。最も危惧していた事態が、予想よりも早く、起きてしまったのだと。

一一節　襲撃（後編）

ほとんどの文献は破棄されてしまい、詳しい知識こそないが、確かにナイレアラ帝国という国が、海の世界に実在した。
これは数百年も昔の話であり、もはや、架空の国のような存在、重要ではないような事項となっていた。
そう、度重なる事件が起こる前まで、アウストリヌスが気にすることはなかったらのである。
考えを改めたのは、最近になってから、ナイレアラの名を語るテロが、急増してからだ。

「にぃに、早く殺して帰ろーよ！」

金色のツインテールを、ぶんぶん振り回して、ララは言った。
少年は、結晶の牢獄に軽く触れ、一言呟いた。
結晶が割れる。
同時に、軽い衝撃波が、アウストリヌスにまで伝わってきた。

一一見た目は子供だが、相当な手慣れ……

彼らはこの場所までやってきた。修練をつんだ衛兵が、城中を警備していたにも関わらず。

アウストリヌスは、再び結晶の牢獄を形成する。より大きく、強固に。

だが、彼らを捕らえることはなかった。三人は、大きく跳躍すると、アウストリヌスから距離をとり、牢獄形成より早く脱出する。

「お兄ちゃん下がってなの！ララちゃん、おっきいの行くよ！」

「あ～い！オッサン、あまりの凄さに、どっきゅんしちゃうからっ！」

二人の少女が前に出る。金髪のララは、どこからともなく、真っ黒な斧を取り出した。ところどころが金色に放電している斧と、風を纏う鎌を、二人の少女は構える。

その風貌から、まるで死神を彷彿させられた。

急激な魔素の集束を、アウストリヌスは感じた。同時に、少女達からは詠唱が。

「深き森に潜みし竜の息吹　旋毛と為りて万象を征け　風法　松籟旋風乱（ふうほう　しょうらいせんぷうらん）！」

緑の風を纏いしなと、

「大地を駆けし一元の光　竜と為りて千を貫け　雷法（らいほう）　天呼轟雷霆（てんこごうらいてい）！」

金の雷を纏いしララから――それぞれの得物を天に掲げ――雷と風の奔流が迫る。

――なんて高威力魔法だ……

天井のシャンデリアが、渦に呑まれ、跡形もなく消滅するのを見て、アウストリヌスは驚愕した。

急ぎ牢獄の結晶を変化させ、巨大な壁とする。厚さ数十センチ、天井まで届く巨大な結晶の壁は、雷と風を正面から受け止めた。

クリスタルの向こうには、緑と金の渦。結晶を、じわじわと削り取るように突き進む。削り取られる結晶は、再び組成される。
アウストリヌスの額からは、汗が吹き出していた。

やがて、風雷の束が収まる。アウストリヌスは、一息ついて汗を拭った。ところどころ、クリスタルはひび割れている。
だが、それは、嵐の前の静けさというべきものだった。
不気味な笑みを浮かべた少女は、鎌と斧を輝かせる。
はっとしたのも、つかの間の閃光。雷鳴。そして爆音。

ーーこ、これは！？

目を見開いたアウストリヌスが見たもの。緑と金に包まれた少女達の頭上が、天井が吹き飛び、暗雲に覆われた空が、露になった。

「「せぇ～のっ！」」

「ななと」

「ララの」

風と雷が合わさり、混ざり合い、、想像を超えた物として、生まれ落ちる。

「「ーーーーーテンペストォ！！」」

雲の下から現れたのは、巨大なドラゴンの顔。それは竜の化身。電気で骨組み、風が肉となる。嵐竜は、雲から全身をさらけ出すと、雷鳴の雄叫びを上げ、地面に向けて、爆風を吹き付けた。

目を見開いたままのアウストリヌスの瞳には、かつて足を奪っていった、否、大切な人をさらっていったドラゴンが、映し出された。

「「嵐法（らんぽう）　風靡竜獄雷（ふうびりゅうごくらい）！！」」

少女達が、それぞれの掲げた得物を、振り下ろすと、嵐竜は、顎を開き、一瞬にして垂直降下。

呆然と立ち尽くすアウストリヌスを、喉の奥へと飲み込んだ。

――私は約束を……あぁ、すまないミライ。きっと、そっちにも……助けに行けないのか……

自分の死を、絶望を、アウストリヌスは悟る。

まばゆい光。

足を焼かれたときのような激痛は、不思議なくらい感じなかった。

肉体が嵐に喰われる程に、痛みは薄れていく。

むしろ、光が暖かく感じる。目の奥で強さを増す光に、あの人の面影すらを感じた。

――アス。あなたは、私の分まで、よくやってくれましたよ。

光が、そんなふうに語りかけてきたような気がした。

懐かしい声。十年以上、聞くことは無かった、失われた音色で。

――娘は大丈夫。あの子は私達の娘だから、必ず。後は、私達のミライを信じて……

涙がこぼれ落ちた。愛したあの人の声に、絶望しかないはずなのに、彼女は、またしても自分を救ってくれた。前は命を、今度は心を。

同時に、ずっと今まで、見ていてくれたんだと。
彼女の光に、アウストリヌスは呟いた。最後の言葉が、光に溶けて消えていく。

――うん、イシュ。私は、いつまでも信じてるさ。私達の娘を……ずっと……ね。

アウストリヌスはゆっくりと目を閉じる。涙を、一粒、光に残して……

天から突き刺さる竜の化身は、残像を残し、やがて霧散した。
めちゃくちゃになった玉座の間の中心部には、焼け焦げた義足だけが転がっていた。

「ターミネートしゅーりょーなのっ！」

鎌を軽く振るって、ななは、嬉しそうに、もう片方の手で、ピースサインをすると、少年の顔に当てた。

「逝っちゃった逝っちゃったいえ～い！」

拳を突き上げて、ララは、はしゃぐ。
少年は、ななの手を振り払うと、黙って一人玉座の間を後にした。

「あっ、お兄ちゃん勝手に帰らないのっ！」

「ちょっと、待ってよー！」

その後を追う二人の少女。破壊された天井からは、しとしとと、雨

が降り、焦げた地面を濡らしていった。

一二節　究極芸術（前編）

自室を出て、真っ暗な長廊下へと出たミライは、塔全体が揺れるほどの衝撃に襲われた。

バランスを崩しそうになるが、日々の鍛錬が、そうはさせない。魔法で光を灯した剣も落とさずに、何とかその場に踏み留まった。

――うっ……誰ですの！？こんな化け物みたいな魔力を解き放ったのは。

続いて嫌悪感が襲いかかってきた。めまいがして、思わず壁に、もたれかかる。

ミライほどの高位魔導師になると、離れた場所にいても、莫大な魔力を感知してしまう。

丁度、人が風を感じるのと同じように、普段から魔素を感じているので、強力な魔法の行使時に生じる、大きな魔素の乱れに気づくのだ。

気づくというよりも、気味が悪くなってしまい、めまいに似た症状が起きる。

ゆっくり顔をあげて、廊下に取り付けられた、ガラスの窓を見たとき、突然、胸の奥で、巨大な魔素の塊の消失を感じた。

はっとして、ガラスに駆け寄る。向こうの塔を見ようとしたとき、廊下に響く足音が聞こえてきた。臨戦態勢。

フェンリルを構える。

「カレン！？無事でしたのね！」

暗闇から姿を現したのはカレンだった。安堵から、ホッと息を吐いて、剣を握る力が緩まる。

カレンも、ミライに気付いたようで、足を止めた。

「いつになっても、お部屋に来てくれないので、心配したので……えっ？」

笑みを浮かべていたミライの表情が硬直した。

唐突に、カレンの横で炎が上がった。

カレンの目線が、ばつが悪そうに下を向く。

炎が紅いマントに。

火の粉が顔を形成して、長い茶髪へ。

ミライの部屋を襲った男が、カレンに並ぶように現れた。

「驚いたかい？使用人がスパイだってことにさ」

男が言った。胸の当たりには、剣で貫かれた跡が残っている。それでも、その下の傷は、なぜか塞がっていた。

「な何を言っていますの？カレンがスパイ？そんなはずが……」

「カレンが俺の傷を治したのが証拠だ。分かるはずだ。この傷が、カレンの魔力によって治されたということぐらい」

ミライは魔力を感じることができる。普段から一緒にいる魔力が、男の腹部から漏れていることを、見逃すわけがない。それでも、何かの間違いだと、気づかないふりをしていた。

「カレンという名。それは偽名だ。本当の自分を隠すために、彼女はずっと、呪われた名を隠してきた。真の名、ナイレアラ王国第三皇女、アシテリカ・ナイレアラを隠すためにな！」

「うそ……うそですよね？カレン、今のは全て、うそなんですよね！？」

カレンの素性が不明なことは、アウストリヌスでさえも周知している。姫という地位から、ミライは、友人を作ることができず、唯一仲良くなったスピカとも、しきたり故に離ればなれになってしまった。自分の地位を嘆き、城を飛び出したあのとき、ミライは初めて、同世代の街の子と知り合った。その子は、とても貧しく、親もいない、自分のことを全く知らない女の子だった。ただ、カレンという名前しか、分からなかった。

アウストリヌスが、得体の知れないカレンを、ミライの使用人としたのは、幼いミライの懇願だけでなく、その優れた魔力素質のためである。

「……すいません、ミライ様」

うつむいたカレンは、小さな声で言った。

肯定の言葉は、ミライの目から、小さな水滴を生み出していた。

「過去、フォーマルハウト家が行った、ナイレアラ家に対する数々の屈辱を、全て晴らしてやる。俺の名前も、呪われた家系の一人、コルバート・ナイレアラだ！」

男は、尖った顎を上に向けて叫んだ。細い眼を、さらに細くして。

ふと、男のもとに、小さな竜の子供が、窓の外から飛んできた。まだ、数十センチにも満たないドラゴンは、コルバートの耳に息を吹きかえると、再び来た道を引き返す。
男の口は、目よりも冷たい、にやけ顔になると、クックック、と笑いだした。

「良い情報が入った。俺たちの仲間が、アウストリヌス・フォーマルハウトを殺害した」

天に向けて、コルバートは笑いだす。ミライの手から剣が滑り落ちる。カランと、乾いた音が、そして、残酷な笑い声が、廊下中に響いた。

「終わりだな、ミライ・フォーマルハウト。そして、貴様も――ナイレアラの怨みに染まった血を受けるがよい！」

勢いよく振るわれたコルバートの杖から、火炎が吹き出す。だが、ミライは動くことができない。

――ナイレアラの復讐。

信じていたカレンを、唯一の親を、失ったミライの目には、光が消えていた。
火炎に包まれるミライは、まるで暖かく柔らかな風を感じている気がした。迫りくる死というものはこんな感じなのだろう。
春の草原にいるかのように。
カレンと出会った草原も、柔らかな風と暖かい日差しの下だった。
ゆっくりと消えていく真紅の渦。強くなる風が、ミライの鼓膜を打ち立てる。

ミライの意識を、途絶えさせることがないように。
火炎が消滅。
意識はまだはっきりしている。
それは、ミライの前で、汗を吹き出し、両手を広げ、
「なっ……！？どういうつもりだ！アシテリカ！」
それは、王位を持った姫君が、金ぴかに輝く冠をかなぐり捨て、
「私は……私は、ミライ様のメイドです。主に背くことなど、絶対にできません！」
泡となりし消える運命の、人魚姫となる道を選びとった。
「何を言っているんだアシテリカ！貴様は俺と一緒に王族となり巨万の富を得るのだぞ！」
「それでも、私はミライ様のメイドです。愛した相手を殺すくらいならば――たとえ泡となって消えたとしても、私は、最期まで、主と一緒の道を歩みます！」
主という枠を越え、初めてできた心許せる親友として。
天に輝く一番星は、自分の最期まで、光有って欲しいという願いから。
その確固たる覚悟に、コルバートは唖然とした。
だが、驚きが、怒りへと変わるのも、短時間に過ぎず、次なる魔法行使に入る。

「おのれアシテリカ！ならば貴様も泡となり消えるがよい！」
次なる炎がカレンに迫る。
カレンの詠唱が間に合わない。
カレンの前で光が集う。
光が形を造り、クリスタルの壁になる。
「ミライ様！？」
光を取り戻したミライの手には、白銀に輝く剣が握られていた。
「カレン！あなたの覚悟、しかと受け止めましたわ！」
壁の周囲が光り、槍型の結晶になる。壁が炎を受け止めながらも、槍はコルバートを突き刺しにかかった。
「ナイレアラを――なめるなぁ！」
炎の渦が増幅。瞬く間にしてクリスタルが飲みこまれる。
過去の経験から、コルバートが使う魔法には、対晶術に特化されている。結晶の構造の結びつきを、破壊してしまうようになっているのだ。
迫る炎。
追いつかない結晶の組成。
ミライの表情に焦りが見えたそのとき、巨大な影が、大きな音をたて、空から降ってきた。
「――なに！？」

炎を受け止めたのは、巨大な長机だ。
ミライとカレンは、距離をとるため、背後に跳躍。
魔法の力で、常人とは思えないほど、大きく跳んだ。

「でかしたラスター」

「まぁ、当たり前のことをしただけさ。浮遊魔法は、基本中の基本だからね」

着地地点で、二人には、そんな声が聞こえた。
後ろを見ずとも分かる声。
どうしてか、少し安心する二人。

「助けに来るのが遅すぎますわ！」

「えぇ、本当に」

自然の流れで、ミライは前に。カレンは後ろへ。
クリスタルの加護を受けた二本の剣が、指導を施した師弟の杖が、隣り合った。

一二節　究極芸術（中編）

「ナイレアラの者に、ミライ様の晶術は通用しません。コルバートの魔法は、攻撃に特化した強力なものです」

真紅の炎を防ぐのは、自分でも耐えきれないと、カレンは言う。攻撃魔法を仕掛けたところで、コルバートを包み込むかのようにして、炎が盾となり遮るだけ。剣技による物理攻撃は、大きなフォーマルハウト城の廊下といえど、直線的なものとなってしまうので、やはり不利である。

「うん、僕は……後ろで分析担当ということで」

ラスターがこういうのも、無理はないと、カナデは思った。

だが、一つだけ、この絶対的に不利な状況を覆す手段が、ある。

「晶術が使えないならば、あの魔法を使っ……」

「いや待て。俺がやる。いい考えがある」

カナデは、ミライが何かを言いかけたのを制止した。

ムッとしたミライは、

「正気でして？魔法が使えないあなたに、何ができるのですの？」

と、文句を言う。

だが、カナデが、一回だけ、目を擦ったその視線は、しっかりと前を向いていた。

――この男はいったい何を企んでいるのかしら。例の魔法薬みたいなものが、まだあるとでも言いたいのですの？

ダイダロスを撃退したときに使われた妙な薬品。
フッ化なんたらとかいう魔法薬に似たものならば、もしかしたら……

「いいでしょう。分かりましたわ。ただし、失敗したときには、みんな死んでしまいますのよ」

「大丈夫、任せろ」

カナデは、微かに頬を揺らして、チラリとミライを見た。
なぜだか、ミライはそっぽを向いた。
それを見て、なんだかカナデはおかしくなり、クスりと笑った。

しかし、ここは戦場。
再び火蓋が切って落とされる。
壁になっていた長テーブルが、ついに破壊されたのだ。
上がる炎。
木が焦げた匂いが、漂ってくる。

「防火製のテーブルとは、なめたマネをしてくれたじゃねーか」

炎を纏い、ヘビのような眼で迫るコルバート。
炎の揺らめきさえも、ヘビのように見えてしまう。

「これでも僕は一流の魔導師だからね。君が炎を使っているのを見て、瞬時に対火用の膜を張ったのさ」

「ちょっといいかしら。フォーマルハウト城のキッチンテーブルには、もともと対火用の魔法がかけられていますのよ」

自慢するラスターに、ミライは突っ込んだ。火事対策のため、フォーマルハウト城にあるキッチンテーブル全てに付加されているのである。

「ナイレアラをなめんなぁ！」

炎のヘビが火球に生まれ変わる。ラスターに迫る。
ぶつかる寸前、強風が吹き荒れ、すぐ横の壁を吹き飛ばした。
中の部屋が丸見えになる。
放たれ再び迫る火の球。
カレンの詠唱が聞こえると、今度は水流が、火の球と衝突。
水が沸騰し爆発する。

「俺の炎の球はそこら辺の魔法とは違う。当たった瞬間に沸騰させてしまうんだよ！」

それでも、カレンは水を火球に当てることで、衝突を防ぐことに専念した。
後退る四人。ミライが結晶を槍にして飛ばすも、やはり炎に遮られる。
ラスターは、浮遊魔法で、爆発で生じた木の破片を投げつけるも、虚しく音を残して消える。

「さぁて、行き止まりだ！」

ついに壁際へと追い込まれた四人。
コルバートは、最期だ、と言い放ち、火球を投げつけた。

「行きますわよ！」

ミライの言葉と同時に、四人の足が、地面から離れる。
クリスタルの翼と、風を纏ったミライとカレンは、カナデとラスターの手を掴むと、そのまま破壊された壁から外へと飛び出した。

「逃がすか！」

炎のヘビをまとわりつかせ、コルバートも飛翔した。

外の様子は、やはり悲惨なものだった。クリスタル騎士団の宿舎が、真っ黒な煙に包まれ炎上。アウストリヌスの塔の方に、思わず顔を向けてしまったミライは、すぐに目を伏せた。
そこからも、太く黒々とした煙が立ち昇っていた。

今は悲しんではいられない。
今、護るべきものがあるからこそ。
同じく、辛い思いをしている人が、一緒に戦っているのだから。

ミライとカレンは、ゆっくり降下し、グランドへと降り立った。

そこへ、再び炎と共に、少し離れた位置に、コルバートが現れる。

「おのれぇ……ろくな魔法も使えないザコどもが、ちょこまかちょこまかと！大魔法で皆殺しにしてやる！」

業を煮やしたコルバートから、凄まじい熱気が放たれた。すかさず飛翔しようとするミライとカレンだが、行く手を遮るようにして、炎の渦が出現。

それは広がり、左右を、上を、後ろを遮った。

「死の業火で焼きつくしてや……がっ！？」

急にコルバートの表情が歪む。彼の腹部が渦を巻く。
炎ではない。身体が、まるで、ねじ曲がるかのように、渦を巻いているのだ。

「俺は魔法が使えない。俺の魔法は全部爆発してしまうから。だけど、要は使いようだろ？」

苦痛で歪むコルバートの瞳孔が、恐れに変わった。
驚きを通りこして。
カナデの瞳に映る紋章が、コルバートの網膜に刻印される。
一つは時計。
もう一つは自分自身の腹部。

「俺はずっと待っていた。広い場所に出て、お前が足を止めるときを！」

「ババカな……魔法もろくに使えないき貴様が、どど瞳術だと！？」

取り囲む炎が消滅。
逆回転する時計の針。
歪みゆく自分の腹部。
夜よりも暗い闇が、そこでは蠢（うごめ）いていた。
信じられないといった表情は、コルバートだけでなく、ラスターも、ミライも、魔法に最も長けているカレンでさえも。

「ミライ、お前の芸術が粉砕だというのならば、俺の芸術は――爆

発だ！！」

極限までねじ曲げたバネを戻したらどうなるか。
それが、もし、バネよりも大きな、例えば、それが、時空間そのものだったら。

「ややややめろー！」

直感が、警告のサイレンを鳴らし、コルバートは懇願した。それでも、ねじ曲げられたものは、自然の摂理に従い、元に戻ろうとする。
切断されない限りーーーーー

「時空爆星（じくうばくせい）！！」

時空間そのものが、大爆発。
歪められた分だけのエネルギーが、コルバートの身体を叩きつけ、

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ドームを木っ端微塵にしたときのように、砂煙を巻き上げ、衝撃の渦が繰り返される。
痛む両目。
血が出ているように、奥が痛む。耐えきれなくなったカナデは、両目を閉じた。
すると、爆発はゆっくりと収まり、幾度となく衝撃に打ち付けられ、血液が噴出している肉体が一つ、空から降ってきた。

コルバートに近寄る四人。目の激痛の中でも、カナデは、なんとか気絶を免れた。

「ぐっぅぅ……俺を倒してもムダだ…」

虫の息で、コルバートは言った。

「万が一にもアシテリカが背いたときのために保険があって…だな…今から十分後に…そいつに埋め込んだ魔導回路が爆発する…」

はっとしたのも束の間で、カレンから、真っ赤な光が解き放たれる。光が真っ赤な首輪のようになり、中心に巨大な物体を形成。首が締まり、倒れこむカレン。

ミライは、コルバートの襟首を掴み、揺さぶる。解除しなさい、と叫ぶ。

されるがままのコルバートの冷たい笑い声が、空に響くが、

「ふはははは…貴様らも俺と道連れだ！ふはははははは……」

最後は小さな笑い声と共に、ぐったりとしてしまい、動きを止めた。

一二節　究極芸術（後編）

「ミライ様、逃げて下さい。晶術でナイレアラの魔法は無効にできません。これは私の罰です。一度でも、主君を裏切ってしまった私に……」

クリスタルパルスですら破壊は不可能。爆発物付きの首輪を嵌められ、運命を悟ったカレンは、せめて、みんなだけでも生き延びて欲しいと……

「少し黙りなさい！」

怒鳴り声が、頭を突き破った。ラスターの腰が浮き上がり、ただでさえ痛い目に刺激を受けて、カナデはまぶたを押さえ込む。

「わたくしに不可能があるとでも？冗談は大概にしなさい！」

さらに大きな声で、ミライは言った。フェンリルを強く握る。

「邪魔ですわね。お二人とも遠くまで下がりなさい。見せてあげますわ。わたくしの究極芸術を！」

カナデを支えたラスターは、ミライに連れられ移動。

真っ暗な空からは、いつからか雪が降ってきた。

「なぜ……今はまだ夏なんだ。僕の目までおかしく……違う、なんだこの感覚は」

ラスターは我が目を疑った。

雪に。気温の急激な低下に。

カレンからずいぶんと離れたミライの背中からは、巨大な翼が現れる。六枚の翼は、巨大になり、大きく開かれ、はばたき、宙を舞う。
気温が下がる。
空気中の水が凍る。

痛みが引いてきたので、目をゆっくりと開いたとき、カナデは空を舞う光の粒子の正体に気付いた。
粒子は少しずつ、大きくなり、形を造る。

白銀の光を放ち、網目状に結びつく。

「縛晶宝網（ダイヤモンドバインド）！」

ミライの呪文が、光を、超巨大なクモの巣を構築。
距離にしておよそ百メートル以上のところから、カレンに絡みつき、大の字に磔（はりつけ）にした。

さらに気温が下がる。
空の雲が凍りつき、ゆっくりと地面に垂れ込む。
黒々としていたはずの雲は、白銀に輝く透明な結晶体へ。巨大な天使の翼を開いたミライの前方で、それはとどまる。結晶の塊は、それぞれの端を、クモの巣と絡み合わせ、

「カレン！少し痛いですけど、これは命令ですわ！必ず耐えなさい！」

太陽のようなまばゆい光を放ち始めた。
光の粒子が、クモの巣を伝い、結晶に集う。

「魔素だ。魔素をあの結晶に集めてるんだ！ミライ様は、いったい何をしようと」

大気に溢れる魔素を集め、巨大な結晶に溜め込んでいると、ラスターは言う。普通では考えられない、一歩間違えれば大惨事だ、と付け加えて。

やがて、小さな光の塊が、結晶内部で生まれる。

――それは少しずつ大きくなり、

「α　ｐｉｓｃｉｓ　Ａｕｓｔｒｉｎｉ（悠久の大地を凍てつかせ　氷雪の力を解き放て　形在るものに心を与え　形無きものに息吹を与えよ）」

――音階に合わせ、

「Ｆｕｍ　ａｌ　Ｈｕｔ　ａｌ　Ｇｅｎｕｂｉ（いにしえを超えた神々の黄昏　全てを滅す絶対零度）」

――碧くなりゆく光の球は、

「Ａｌ　Ｄｉｆｄｈｉ　ａｌ　ａｗｗａｌ（それは未来に刻まれし芸術　それは過去に残された産物）」

――結晶そのものを飲み込んで、

「ｐｉｃｉｓ　ｏｕｓ　ｔｏｒｉｎｉ（いかなるものも美しく）」

――太陽よりも、眩しく、

「ＦｏｍａｌＨａｕｔ（ただ一瞬にして散るだろう）」

――凍える大地を照らし尽くす。

真っ青の球体。生まれた青い太陽は、月すらも隠す光を放つ。
真昼のような光。青色が、世界を支配する。

「一つだけ、しっかりと覚えておきなさい！」

長い髪を水平に靡かせ、天使は掲げた剣を球体に突き立てる。
尚も膨張球体。
耐えきれなくなったクモの巣の端が、破けはじめ、球体に飲みこまれる。

「わたくしの魔法は――――誰にも負けない最強ですわ！これがわたくしの究極芸術！」

轟音が響く。
大気を舞う白い粒子。

結晶本体をも融解させ巨大に膨れ上がった碧色の球体。

ミライは剣を球体に思いっきり突き刺し、碧い太陽は、

「絶晶（ダイヤモンドォ）――――宝砕（ブレイカァァァァ）！！」

――闇を一閃。
――貫く。

――ぶち抜いた。

光の束が、碧色が、大地を照らし、鼓膜を破壊しかねない爆裂音を鳴らし、磔にされたカレンはもちろん、クモの巣全てを突き破る。衝撃波が、暴風となり、燃える宿舎の炎をかき消す。

「信じられないよ。なんて魔法なんだ」

口をあんぐり開け、ラスターから言葉が漏れたのを、カナデは聞いた。

周囲に撒き散らす光は、白から碧に。

碧い雪が、空を舞う。水平線の向こうまで、縮まり、突き破る光を中心にして。

ゆっくりと収まる光線。射ぬかれたカレンの身体も露になる。

目を閉じ、残った網に手足が引っかかり、大の字に磔の状態で、目立った怪我もなく、首輪もついたままで。

「終焉破殺（パルスエンド）」

小さく、だけどはっきりと、ミライは呟き、剣を横に払った。

衝撃波が生じる。

小さく弱いもの。

触れた瞬間に、クモの巣が消える。手足の拘束が解ける。嵌められた首輪が、パラパラと粉になり、見えない光となり消滅。カレン本体を、分解することなく。

「ミライ様は……ルチア様を、超えられたんだ」

自由落下を始めたカレンを、空中で受け止めたミライを見て、ラス

ターの口から、ため息が漏れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9096r/

第一章 破晶姫の訪問者（エトランゼ）

2011年10月12日07時39分発行